知識偏重社会への警鐘

日本認知科学会
教育環境のデザイン分科会
活動記録 No.11

2020 年 10 月 25 日
オンライン開催

日本質的心理学会第 17 回大会　会員企画シンポジウム：
知識偏重社会への警鐘
―「知らない」のパフォーマンスが未来を創る―

開催日：2020 年 10 月 25 日　16 時 30 分～18 時 30 分
場所：オンライン（Zoom）
企画：石田喜美（横浜国立大学教育学部）
司会：岸磨貴子（明治大学国際日本学部）
話題提供：茂呂雄二（筑波大学大学院人間総合科学研究科）
　　佐伯　胖（田園調布学園大学大学院人間学研究科）
パネルトーク：太田礼穂（青山学院大学社会情報学部）
　　新原将義（帝京大学高等教育開発センター）
　　渡辺貴裕（東京学芸大学教職大学院）
　　山口（中上）悦子（大阪市立大学医学部附属病院）
　　サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）

■企画趣旨

石田喜美（横浜国立大学）
岸磨貴子（明治大学）

岸：それでは始めたいと思います。どうぞよろしくお願いします。今日は 16 時 30 分から 18 時 30 分まで、皆さんと一緒に楽しい時間を過ごすことができればと思います。よろしくお願いします。

タイトルは「知識偏重社会への警鐘――『知らない』のパフォーマンスが未来を創る」ということで、今回このメンバーの多くが、ロイス・ホルツマン(2020)『「知らない」のパフォーマンスが未来を創る――知識偏重社会への警鐘(原著名：Overweight Brain)』（ナカニシヤ出版）の翻訳に関わっています。今日は、これを踏まえながら、対話を始めていきたいと思います。

この本について、著者のロイス・ホルツマン先生は「この本をきっかけとして、私たちの身の回りのことについて会話を始めてほしい」とおっしゃっています。会話をはじめるための本ですので、ホルツマン先生が意図するように本シンポジウムでもみなさんと会話をしていきたいと思います。

石田：はい、ありがとうございます。日本質的心理学会第 17 回大会の抄録集がお手元にある方は、47～48 ページに、企画趣旨が書かれていますのでそちらをご覧ください。今から、簡単にその内容をお話していきたいと思います。

このシンポジウムでは、さきほど岸先生からお話しいただきましたとおり、ロイス・ホルツマン(2020)『「知らない」のパフォーマンスが未来を創る――知識偏重社会への警鐘』（ナカニシヤ出版）をめぐって、対話を行っていきたいと思います。本書のメイントピックのひとつに、「Unknowability」，すなわち，「知らない」ことの潜在力・可能性があります。これについて、皆さんと議論していきたいと考えています。

日本質的心理学会第 17 回大会の大会テーマは、「離れる――社会的距離の中での親密性」です。コロナウイルスの感染の拡大の中で、私たちにとって未知なる状況が、日々、起こっています。そのような中、「知

らない」「知りえない」社会で生きていくための知恵やコミュニケーションのありかたを問い直すことが求められています。そのような契機に、今、私たちは立たされているように思います。そのような事態を生き抜こうとするなかで、本書が、教えてくれるものは、非常に大きい。そのような本書の可能性について、さまざまな分野から議論したい、というのが本シンポジウムの趣旨です。本日は、さまざまな分野の登壇者の方にお集まりいただいていますので、登壇者の先生方のお話を聞きつつ、議論を広げていければと思います。よろしくお願いいたします。

全体の流れ

概要説明：石田喜美（横浜国立大学）

登壇者紹介：岸磨貴子（明治大学）

話題提供：茂呂雄二（筑波大学大学院）

佐伯胖（田園調布学園大学大学院）

パネルトーク：
太田礼穂（青山学院大学）
新原将義（帝京大学）
渡辺貴裕（東京学芸大学）
山口悦子（大阪市立大学）
サトウタツヤ（立命館大学）

■登壇者紹介

岸：喜美先生、ありがとうございます。では、登壇者の先生方を紹介いたします。

まず初めに、編訳者として関わられた茂呂先生、そしてパネルトークにご登壇いただく訳者の先生方に自己紹介をしていただきます。その際に、自己紹介に加えて、担当された章について簡単にご説明いただきます。そして本日パネリストとして登壇いただきました佐伯先生とサトウ先生にご紹介いただきたいと思います。

では、まず「パート 1」のところについて、喜美先生からご紹介をお願いします。喜美先生、自己紹介と本書の紹介をお願いします。

石田：はい、よろしくお願いします。私は、すでに、自己紹介をいたしましたので、「パート 1」のみの紹介をいたします。

本書は三部構成です。「パート 1」「パート 2」「パート 3」という 3 つのパートが設定されています。このうち、「パート 2」「パート 3」では、「知らない」ということの可能性に焦点を当てて議論がなされますが、「パート 1」は、過去との対話、過去の先人との対話に焦点が当てられます。

「パート 1」の第 1 章では、ロイス・ホルツマン自身のライフヒストリーが語られます。著者自身のライフヒストリーの中で、「知ること」とは何か、「成長すること」とは何かが議論されます。

第 2 章・第 3 章では、先人との対話が繰り広げられます。第 2 章では

ヴィゴツキー、第 3 章ではヴィトゲンシュタインが取り上げられ、ふたりの先人の対話、先人同士の対話の中から、いかなる「知らない」ということの可能性が導き出されるのかが議論されます。

「パート 2」からは、それぞれの訳者の先生方にご紹介いただきたいと思います。よろしくお願いします。

岸：では、礼穂先生お願いします。

太田：はい。ありがとうございます。青山学院大学の太田と申します。第 4 章を担当しております。私の専門は教育心理学でして、子どもが、何かを、いつの間にか「わかる」「学ぶ」ということについて、大人と子どもの共同活動の中でどういうふうに達成されているか、ということに関心を持ち、研究を進めています。

私が担当させていただいている章はですね、第 4 章「知ることの内容とその方法」ということで、非常に、自分の関心と近い内容について翻訳させていただきました。この章、第 4 章では、私たちが今生きて世界において「知ること」「わかること」が、どのように成り立っているのかという話が展開されております。

例えば、なんですけれども、仕事で同僚に会釈をしたらなぜか挨拶を返してくれなかった。そんなときに、私たちは「何で」と思ってしまいます。そして「私のことを、何かよくわからないけれども、良く思っていなくて、それで、きっと無視したんだわ。」という感じで、原因をついつい考えてしまいます。あるいは子どもの問題行動を見て、「家族が原因なのね」とか「友達が悪いのね」みたいな、ここに参加されている

皆さんは、あまりそういうお考えの方はいらっしゃらないと思うんですけれども、そんな調子で、もっともらしい因果関係を想定して、事を進めようとします。

皆さんもおわかりだと思うんですけれども、こういう考え方って、なかなか、乱暴な捉え方だな、と思われるわけです。そうなんですけれども、しかしこういった私たちの「知ること」「わかること」の営みは、例えば、このようなもっともらしい原因探しの会話、因果性の言語ゲームというものに傾倒していって、それが私たちを、知識偏重に結びつけているのではないか、というふうに、ホルツマン先生はこの章で議論されています。

また、これは何も日常生活だけの話ではなくて、心理学も、御多分に漏れず、同じ状況にあるという、そういう問題意識を提起しています。

第 4 章は、そんなことが論じられている章です。

本日のシンポジウムでは、「『知らない』のパフォーマンスが未来を創る」ということで、「知る」ことと「知らない」ことが、学習においてどういうインパクトを持つのか、ということを皆さまと一緒に考えていければいいなと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

岸：礼穂先生ありがとうございました。次に第 5 章を担当してくださった渡辺先生、お願いいたします。

渡辺：よろしくお願いします。渡辺貴裕です。私は専門が心理学ではなく、教育学、中でも特に実践に近い教育方法学という分野です。この学会には、私は非会員で初参加ですので、百戦錬磨の皆さん、どうぞお手

柔らかにお願いします。

私が担当させていただいたのは第 5 章、学校のことを扱った章です。「バカげているのは子どもではなく学校だ」という章。この章は特徴的な構成になっていて、例えば「A は権威主義 authoritarianism の A」とか、「B は境界 boundaries の B」みたいに、前半では、ABC になぞらえるかたちで、学校に対する批判を挙げていっています。そこだけ見ると、一見学校へのよくある文句を書き連ねたものに見えかねないのですが、それにとどまらない面白さが 2 点あるように思います。

ひとつは、本書の他の議論とのつながりです。心理学への批判であったり、二元論や二分法への批判であったり、他章で扱われているそうした視点でもって学校を見ていった場合に何が見えてくるかが示されています。

もうひとつは、章の作り方・使われ方です。「A は権威主義の A」みたいなキャッチーな示し方は、専門家ではなく一般の人にも届けるという本書の趣旨を表すものでもありますが、さらにホルツマンは、この ABC の原稿を書き上げた後、それをネット上で公開して、「D」以降もアイデアを募集し、「D は何々の D」みたいなものを一般の人々と一緒に作っていったんですね。そうした使われ方そのものがパフォーマンス的とも言えるかなと思います。

なお、私自身は、本書を、自分の今の研究の、2 つの柱に引きつけて読みました。演劇的手法を用いた学習のことと、教師教育、特に実践をめぐる対話です。本書は、そのどちらにもすごくヒットする内容でした。それに関しては、また後の議論の中で紹介できたらと考えています。

なお、関連して、こちらの『なってみる学び』（渡辺貴裕・藤原由香

里著、時事通信出版局、2020 年）は、演劇的手法を用いた学校改革を扱った本なのですが、今日ご登壇の太田先生には、パフォーマンス心理学の視点からそれがどう捉えられるかというのをコラムで書いていただいています。ご覧いただけると嬉しいです。

岸：はい、渡辺先生ありがとうございます。では第 6 章を、茂呂先生お願いします。

茂呂：はい。第 6 章を担当しました筑波大の茂呂といいます。第 6 章は「心理学が作ったベッドに住まないとすまない私たち」という、そういうタイトルの章になっています。

本書は、私たちの世界、現代の世界がいかに「心理学化」されているかということを、いろいろな話題に基づいて、紹介している――そういう本です。本全体が心理学の本であると同時に、心理学の本ではない。心理学を一般的に見ると、本書はそのように位置付けられると思います。そういう本です。

ただし、「アンチ心理学」「反心理学」というよりは、心理学とともに、心理学が好きでも嫌いでも生きていかないといけない、というのが、現代の私たちの社会なのだと。そういうところから考えている。そういう本でもあります。

その中で、特に面白いと思うのは、何でそういう心理学というのが、人々につらいこともたらしているところを、その大元である、心理学の大元である哲学が持っていた病から、解きおこそうというのが、この本の背後にある考え方です。

そのことについては、またあとで時間をいただいているので、そこでじっくりと、お話したいと思います。今日は皆さんといろいろ議論できることを楽しみにしております。よろしくお願いします。

岸：ありがとうございます。では、第 7 章をご担当くださいました新原先生、お願いします。

新原：帝京大の新原です。簡単なんですけどスライド（図 1）を作りました。

まず、私の今の仕事なんですけれども、帝京大の高等教育開発センターというところで FD の、皆さんあんまりお好きな方いらっしゃらないと思うんですけれども、研修の企画とか実施というものを担当しております。特にワークショップとかアクティブラーニングがどういう発達に繋がるのかみたいなことを研究していたんですけれども、特にこの FD に携わるようになって、大学でやっている授業とかアクティブラーニングというのがいわゆる成熟した市民というか、社会とか政治に、責任を持てる人をつくるっていうことに、あまりこう、成果を残せてないんじゃないかっていうことを考え始めていて、最近は若者が、政治とか社会に対する批判的思考というのをどう発達させる場みたいなことをやろうとしているところです。

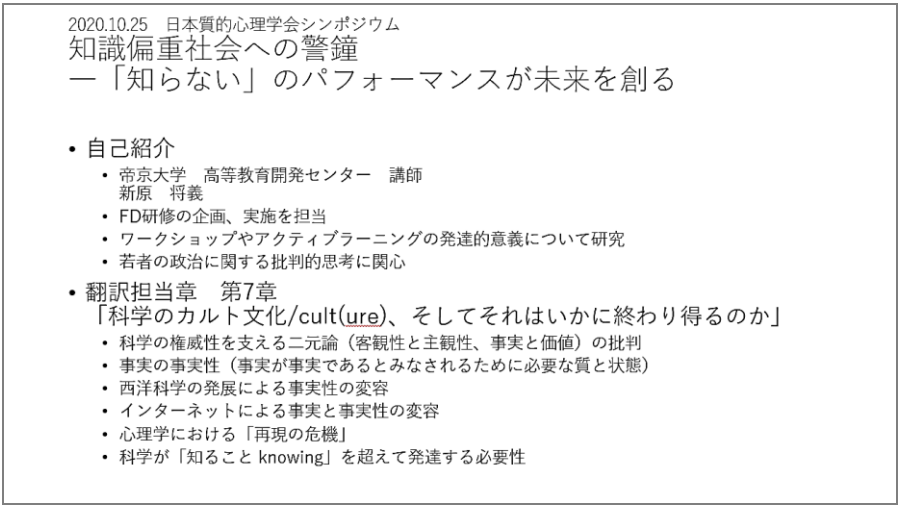

図 1 スライド資料（新原）

担当した第 7 章なんですけれども、「科学のカルト文化、そしてそれはいかに終わり得るのか」という章です。「カルト文化」っていうかなり、強い言葉が使われているんですけれども、内容としては、「科学」というものが、僕たちの生活の中ですごい権威性を持ってしまっていると。その権威性っていうのは何に支えられているのかということを考えていくと、けっこういろんな、極端な二元論みたいなものが、それに強く影響してるんじゃないかということを指摘して、それを批判していくというような内容になっています。例えば「客観性」と「主観性」って、何かが「客観的」であるって考えるのは「主観的」だよね、という話とか、あるいは、「事実」と「価値」っていうものが、簡単に分けられるっていうのは、近年、西洋科学が発展してきたことによって、つくられたものなんじゃないかというふうなことを指摘しながら、まさにそのあ

とも、そういう科学の権威性っていうものが徐々に崩壊しつつある現代においてどういうことが起きているのか、ということを、例えばインターネットの普及であるとか、あるいは最近話題になっている心理学における「再現の危機」っていうものの例を挙げながら、説明していくという内容になっています。こういうタイミングで、こういう内容のシンポジウムが開催されるっていうのが、すごく刺激的な契機になるのではないのかなと思ってすごく楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。

岸：はい、ありがとうございます。私もすごく楽しみです。では第 8 章をご担当くださいました、山口（中上）悦子先生です。よろしくお願いします。

山口（中上）：第 8 章を担当しました大阪市立大学医学部附属病院の「医療の質・安全管理部」の山口（中上）と申します。よろしくお願いします。まず、訳者の紹介から。第 8 章は、2 人で訳しています。もうひとりの訳者は、長谷川康子先生とおっしゃいます。舞台美術家で、ワークショップファシリテーターをされていて、現在、大阪市立大学医学部の研究員をされています。長谷川先生は、英国セントラルスクール・オブ・スピーチ&ドラマを卒業されて、イギリスとアメリカに 10 年ぐらいいらっしゃって、2012 年に帰国されてフリーランスで活動されているとき、茂呂先生の研究会で、偶然にお会いし、以来、医療現場、とりわけ医療安全教育にインプロを応用する研究を一緒にやっています。

私の方はというと、1990 年に医学部を卒業した医師です。1997 年に

医学研究科で博士号を取りました。小児の血液学が専門です。その後、さらに大学病院で医学研究科の臨床教員として働いていた間に、大阪大学の人間科学研究科でグループ・ダイナミクスを専攻して博士号を取りました。茂呂先生のグループと出会ったのはその頃からです。その後、当時副院長だった現在の大阪市立大学の学長から「医療安全やらへん？おもろいよ」って誘われまして、2009 年から医療安全の世界に入りました。2012 年には WHO にも行かしていただいたりしながら、現在は医療の質・安全管理部という医療安全管理部門の統括をしています。

さて、第 8 章は最終章で、第 5 章と同じく、興味深い節題から始まります。（第 5 章は ABC でしたが）今度は XYZ なんです。第 8 章は、「知ることに頼らない成長（non-knowing growing）」を遂げるための 3 つの重要な特徴を紹介している章で、9 つの節で成り立っています。

まず、「成長の XYZ」と書かれてあります。学びというと ABC から始まることが当たり前だと思いがちですが、それをわざと逆から始めてみましょう、という言葉で始まっています。

最初の Z は最近接領域 zone of proximal development（ZPD）の Z です。この節は、ZPD の解説とパフォーマンスの舞台が作られる具体的な事例の紹介です。パフォーマンスの舞台はどこにでも作れること、パフォーマンスするセラピー、パフォーマンスする学校と、具体的な事例が物語られています。

次は、Yes, and の Y です。コメディーの黄金律である「Yes, and」をが、会話においては話を受け入れ、汲み上げ、広げること、聞き方の幅を広げることについて、人間関係においては人を人たらしめる関わり合いの方法について触れられています。

最後が、X。X は、未知の X ということです。この X はいわゆる数学の解という意味ではなく、可能性を示すという意味で書かれてあります。さて、未知という言葉に対して、私達は定義を持っています。この節では、これまで当たり前だと思われてきた言葉の定義をもう一度見直しながら、未知という言葉の新しい理解、新しい定義が提案されています。それから、未知の反対である「知ること」に頼ることの恐ろしさにも触れられていて、ここが私の専門の医療安全に非常に関わるところでした。

最後は、「私たちの成長を創ること、そして私たちの創造性を成長させること」という節です。ここは、この本を読んでくださった方すべてに向けたホルツマン先生からのメッセージの部分です。創造性について、それから私たちに託されていることなどが書かれてあります。

この第 8 章全体を通じての私見です。この章も、この本自体も、決して自然科学の知識の世界や体系を否定しているわけじゃありません。ただ、それだけが世界を構成しているかのように思い込んでしまうこと、つまり「知ることだけに頼ること」に警鐘を鳴らしている。そこのところは、ぜひ勘違いしないで読んでいただきたいなと思っています。

岸：はい、悦子先生ありがとうございます。

■ パフォーマンスの意味

茂呂雄二（筑波大学大学院人間総合科学研究科）

本日は、まずパフォーマンスの意味について話します（図 2）。

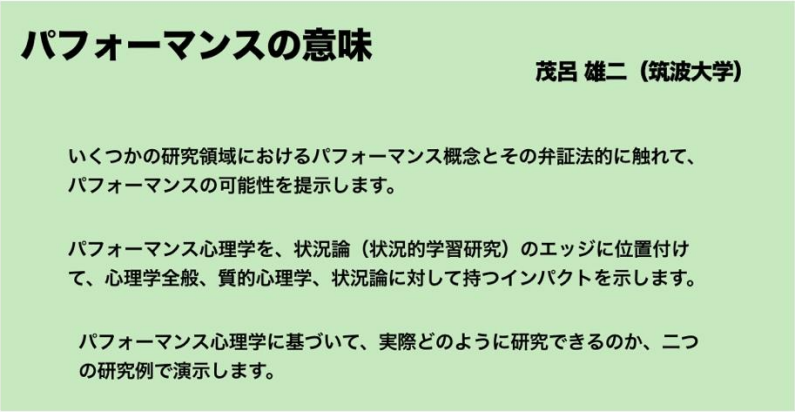

図 2 スライド「パフォーマンスの意味」（茂呂）

パフォーマンスというと多様な解釈が可能で、誤解を生みやすいのかなと思いますので、パフォーマンスの意味について話を始めたいと思います。パフォーマンスとは何か？いくつかの研究領域でパフォーマンスという概念が使われていますが、その中のパフォーマンスに込められている非常にダイナミックな概念について話をしたいと思います。第 2 に

パフォーマンス心理学が従来の心理学に対して、どういうインパクトを持っているのかという話をします。最後に私の研究室でのいくつか研究事例をご紹介するというような話をしていきたいと思います。

パフォーマンスとは何かに行く前に、既に出てきました状況論の展開にパフォーマンスとパフォーマンス心理学を位置づけて、簡単に整理してみたいと思います（図 3）。

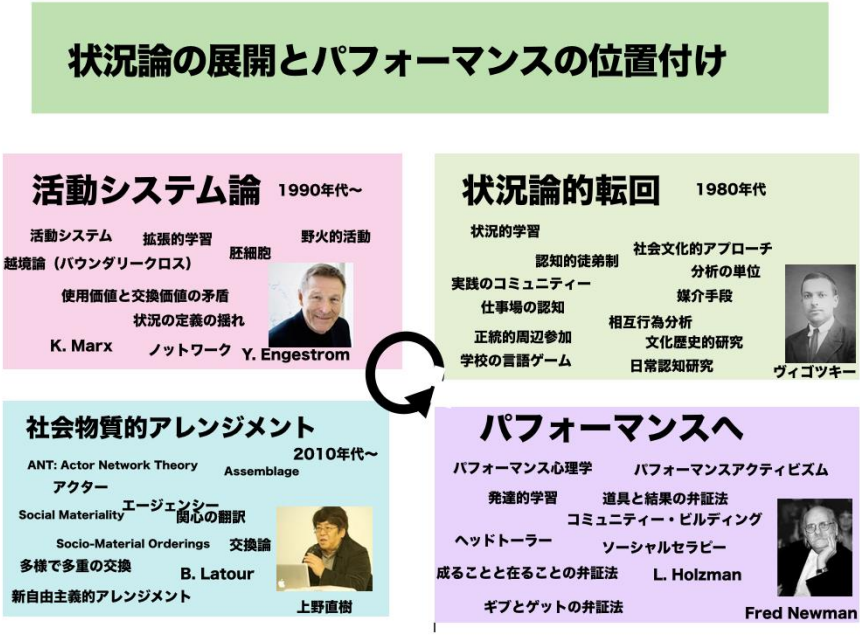

図 3 スライド「状況論の展開とパフォーマンスの位置づけ」（茂呂）

1980 年代に状況論的な展開ということで学習を個人の頭の中に閉じ込めない、社会文化歴史状況に広がった、人々の共同的な活動の中に広

がる学習論が生まれてきました。佐伯先生が、この 1980 年代の学習研究を先導してくださったわけです。

状況論における重要な理論的な仕掛けはレフ・ヴィゴツキーが与えてくれたものでした。それをもとにして徒弟制論、実践のコミュニティ論、参加としての学習論、正統的周辺参加論などなど様々な研究のトピックスが生まれてきました。

これを引き継いだのは、活動システム論の動きと言えます。断っておきますが、今お示している 4 期からなる整理は、客観的に歴史的に研究の展開というものではなくて、私自身が関わった、個人史的な展開を取り上げているということで、私小説的なものと理解していただきたいものです。

1990 年代からの活動システム論は、一体私たちが関わっている活動はどういうようなシステムの中で成り立っているんだろうかと、実際の学校・教室の中、病院やオフィスに観察しに行って、まとめるという方法で展開しました。その中心的な研究者の一人は、ユーリア・エンゲストロームです。今から見ると、古典的とも言えるスキームで活動を分析していますが、いかに、使用価値と交換価値の矛盾が活動システムを突き動かして、活動システムが動いたり壊れたり修復されていくかを、議論していました。

さらに、そのシステムの中身の議論を、徹底しようという議論も生まれてきました。それが、社会物質的なアレンジメント論です。

活動システム論にどうしてもつきまとうサブジェクト（Subject）中心の見方を克服しようとする動きです。主体とか主語とかって言われるものが、どうしても中心になる、人間中心的な見方っていうのをちょっ

とずらしてみようという議論です。私たちの活動を可能にする様々なリソースを、社会物質的アレンジメントの概念で言い換えることで、改めて、活動理論が着目した使用価値と交換価値の矛盾を、アレンジメントに埋め込まれた交換というかたちでとらえ直すことで、例えば、私たちを取り巻く学習の場というのがどんなふうに成立していてどんなふうに変化していくのかも問うことができることになります。

言い換えれば、現在の状況論は、私達の時代を形づくり、独特の色合いを与える、具体的なアレンジメントがどういうものなのか、それを議論し始めたところだと思います。私たちの現在の世界を彩るのは、後期資本主義というか新自由主義です。そしてさらに状況論は、実際その現場に踊り込んで現場を変えようという、介入研究を始めているという段階だと言えます。このような、独特の色合いの理解と介入研究を考えるときに、パフォーマンスというような切り口が使えるのではないかと考えます。

パフォーマンスの意味は 2 つあります（図 4）。

1 つは「コスパ」の「パ」、「コスト・パフォーマンス」の「パフォーマンス」です。かかった費用に対する成果という意味のパフォーマンスです。パフォーマンス・マネジメントというような言葉をネットで見つけましたが、これは企業で働いている人のパフォーマンスを管理したり、指導したりしていくことで、よりよい成果と仕事上の効率を上げようというものだそうですが、このような意味合いがパフォーマンス概念にはあります。

もう一方には、これとはかなり趣の違った意味があります。アートの領域には、路上パフォーマンスであるとか、あるいはゲリラパフォーマ

ンスという言い方がありましたが、何かを上演する演劇的な概念としてのパフォーマンス、あるいは人目を引くような奇異で新規な行為をするということをパフォーマンスと呼ぶ、パフォーマンス概念もあります。これら 2 つのパフォーマンスの概念があります。

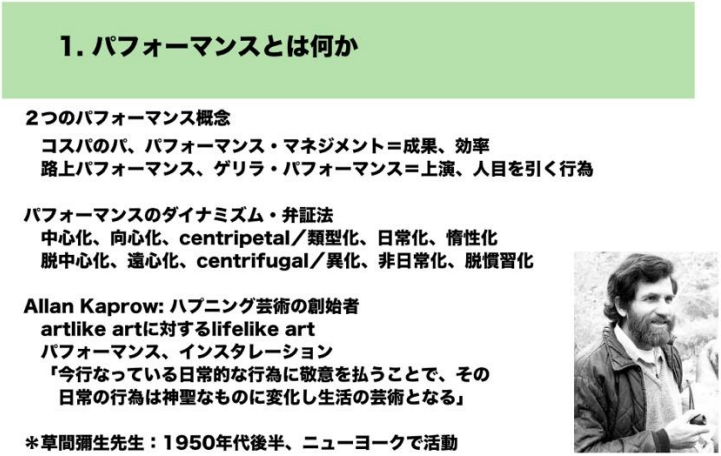

図 4 スライド「パフォーマンスとは何か――Allan Kaprow」（茂呂）

私は、パフォーマンス概念は、ダイナミックで弁証法的な概念として捉えるべきものだと思います。一方では中心化し中心に向かっていく、そういうセントリペタル（centripetal）な動きを持っています。これによって、私たちの活動が類型化したり、日常化したり、惰性化していくという動きがあります。他方では、これとは正反対の脱中心化、遠心化

するセントリフィギュアル（centrificual）な動きというのもパフォーマンスの中にあります。

あるものが異化され、不思議な見え方をして、馴染みのないものとして見えてくる動きです。非日常化し、脱慣習化するとか、そういう動きもあります。パフォーマンスは、この両方を含んでいるものだと見る必要がある。

ところで、ハプニング芸術の創始者に Allan Kaprow がいます。ハプニング芸術の創始者であると同時に，パフォーマンスアートの創始者とも言える Kaprow は、「artlike art（芸術っぽい芸術）」と、「lifelike art（生活としての芸術）」という 2 つのアートを区別します。Kaprow 自身は、芸術っぽい芸術に対抗して、生活としての芸術を進めようと実際にパフォーマンスをしたり、インスタレーションで何かを作り出したりする、というプロセス自体を人々に見せるということで 1950 年代から新しい芸術運動を牽引してきたアーティストです。

Kaprow は、次のようなことを言っています。

「今行っているある日常的な行為に敬意を払うことで、その日常的な行為は神聖なものにも変化しうる、つまり生活の芸術となるのだ。」と。

ファインアートの中にある、これまでの常識としてつくられてきた、「芸術とはこういうものだ」という概念をずらして、生活の中に、あるいは、生活そのものに芸術を求めていこうとするわけです。さらにパフォーマンスによって、アートの枠組みをずらそうとするわけです。

17:11:01 石田喜美 ：
※アラン・カプロ― コロナウイルスの影響で展示中止されてしまい

ましたが、さいたま国際芸術祭 2020 で作品が展示される予定でした
https://art-sightama.jp/jp/artist/uFoQaVfD/

もう 1 人，リチャード・シェクナーという、パフォーマン・スタディーズにおいて代表的な人物の書いた教科書（Performance Studies: An Introduction. Routledge）から、パフォーマンス概念を紹介します（図 5）。この教科書は、2002 年に第 1 版が出て以来、第 2 版，第 3 版，第 4 版と読まれ続けている本です。

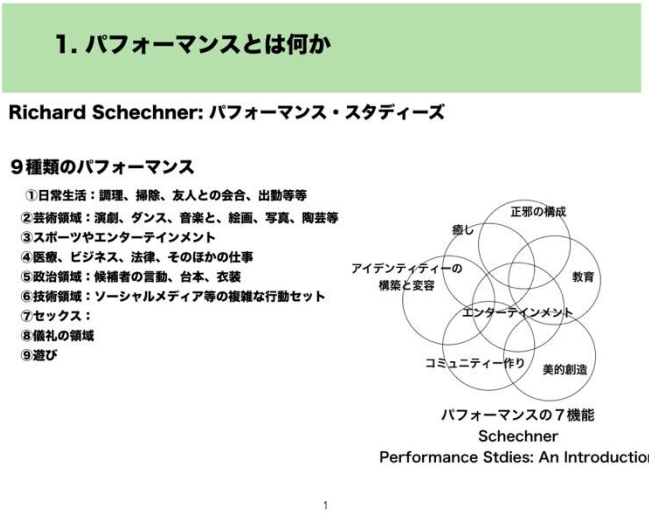

図 5 スライド「パフォーマンスとは何か—Richarc Chechner」（茂呂）

この中で日常生活から始めて遊びに渡る、私たちの生活世界の 9 種類のパフォーマンスを取り上げています。パフォーマンスが全体として 7

種類の機能を果たすとも言います。このアイデアを図 5 の右側にあるような図で示しています。その中で、神聖なものと邪悪なものの対比を構築・再構築する、あるいは癒しをもたらすとか、あるいはアイデンティティに関わったり、コミュニティづくりにも関わったり、あるいはエンターテイメントとなり、教育ともなり、美的なものの創造ともなる。多数の機能の絡み合う図によって、パフォーマンスが私たちの日常生活にさまざまに広がっていることを示しています。

シェクナーにとっては、日常のパフォーマンスと演劇実践の関係性が主な関心事であるわけですが、その中から私たちが学ぶことができるものもあります。パフォーマンスとして見るということで、私たちの生活実践、特に心の営みに関する生活実践というのもを研究する上でも非常にいろんなヒントがあるのだろうというふうに思います。

17:13:31　開始 石田喜美_横浜国立大学 ：
※リチャード・シェクナー『パフォーマンス・スタディーズ』 Richard Schechner (2020). Performance Studies: An Introduction (2020 年)
https://amzn.to/3mnhG7w

次に、パフォーマンスが心理学に対して持つ、インパクトについて考えていきます。

『「知らない」のパフォーマンスが未来を創る――知識偏重社会への警鐘』の著者であるロイス・ホルツマンと、彼女の共同研究者であり、2011 年に亡くなったフレド・ニューマンという哲学者の見方を紹介しましょう。彼ら 2 人は、ヴィトゲンシュタインとヴィゴツキーをミック

スして、マルクスの上で熟成させた、新しい、パフォーマンス心理学を構想しています。

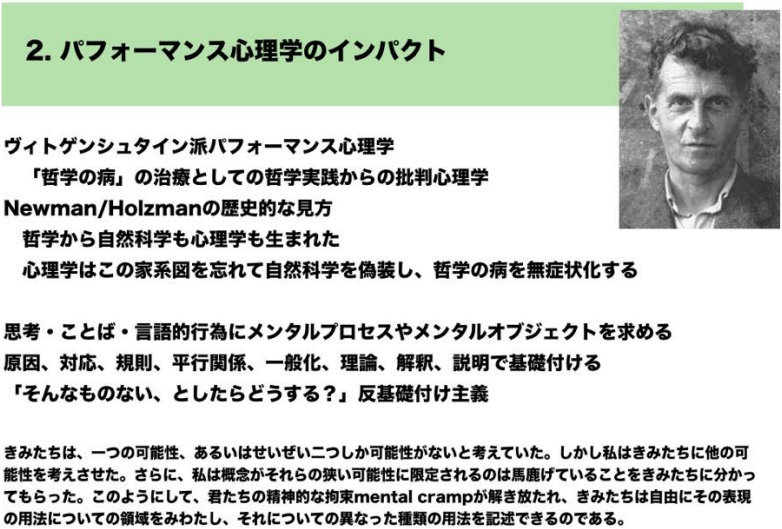

図 6 スライド「ヴィトゲンシュタイン派パフォーマンス心理学」（茂呂）

ニューマンとホルツマンはヴィトゲンシュタインにならって、病に侵されている哲学と哲学的な知の治療が必要と考えます。哲学のセラピーというアイデアを引き継いで、それを心理学ならびにセラピーへの批判に振り向けるという仕事を始めます。

ニューマンとホルツマンは、哲学、自然科学、心理学の三者の歴史的関係に着目します。哲学から、自然科学も心理学も生まれました。その

上で、心理学はこの家系図を忘却してしまい、自分自身を自然科学に偽装して、生みの親の哲学の名前を隠蔽します。

ニューマンは、心理学も哲学の病を引き継いでいると言います。自然科学は、研究対象を、研究する側とコミュニケーションしないものに厳しく限定するために、哲学から引き継いだ病を逃れることができたわけですが、心理学は自分自身を自然科学と思い込み、哲学に由来する病を受け継いでいるのに、自然科学風に研究可能だと自己誤認して哲学の病を無症状化している、これがニューマンたちのパフォーマンス心理学の見方です。

心理学が引き継いだ哲学の病とは、思考や言語的行為の原因にメンタルプロセスとかメンタルオブジェクトを求めてしまうという病です。あるいは原因とか対応規則や並行関係などで、思考とメンタルプロセスの関係を基礎づける病です。私たちは、どうしても、そうしてしまうわけですが、そんなものはないとしたら、どうなるのでしょうか、という、ヴィトゲンシュタインの問いかけを、極めてシリアスに受け止めて、心理学について考える。これがニューマンたちのやり方です。

図 6 の下部に引用したように、通常は「1 つの可能性、あるいは、せいぜい 2 つしか可能性がないと考えていた」でしょうが、「しかし私はきみたちに他の可能性を考えさせた」、きみたちに他の可能性を考えさせますよと、そうすることで、精神的な拘束、あるいはメンタルミストから解放されるんですよということを言っています。

続いて、パフォーマンス心理学において、ニューマンとホルツマンがどんなふうにヴィトゲンシュタインを利用しているかを確認しておきます。ヴィトゲンシュタインは、概念を別の方法から見ることを、強調

します。それを採用して、通常の表象主義と言語／思考間の過剰決定から、私たちを解放する方法を採用しようとしています。

言語使用のフィールドを自由に見渡すと、多様な種類の言語の使用例を見つけることができます。しかし、私たちは過剰に固定された、1つの見方（物象化、内在主義、対応説）でしか見られないのでしょうか――と問いかける、ヴィトゲンシュタインの解放と癒しの戦略を利用しています。

現在の言語の優勢な概念化は、活動から離れて言語自体が独立したかのようにみなすということです。あるいは人間の身体と活動から分離された物象化された言語のモデル化となるわけですが、それを何とか解放して別種の見方、別種の使い方、別種の言語生活の営み方、それを創りましょうというのが、ホルツマンとニューマンのやり方です。言語と意味の間の混乱した哲学的な分離を防ぐために、活動として言語を見て、実践しましょう、というのが彼らの戦略です。

ちょっと次のスライドは飛ばして、パフォーマンス心理学がどのようなインパクトを心理学に対して持っているのかに移ります。まず心理学全般へのインパクトとして、自然科学としての心理学への疑問、あるいは心理学批判というインパクトがあります。

心理学全体が、哲学の、言語と意味の困難を相続しています。特に指示の問題、意味を語と指示対象（リファレンス）との対応関係とみなすという困難を持っています。

心理学と同じく、哲学の子どもである自然科学の前提は、人間（研究主体）と研究対象は無縁だとして距離化することです。しかし心理学と人間科学の場合、距離化は本当可能かと、ニューマンたちは問います。

ニューマンたちの批判には、心理学化された現代社会を理解するというインパクトもあり、距離化を当然視する文化のメンバーである私たちは、個人の頭の中の心＝メンタルプロセスをどうしても考えてしまう。これが様々な混乱やゴタゴタもたらすことになるので混乱からの解放を模索することになります。

言い換えれば心の営みを活動として見るということです。それは創造的な不適応として、人間の活動を見ましょう、ということになります。つまりはパフォーマンスによる突破です。通常の心理学でよく採用される「行動」というユニット（単位）は、自然科学的ではあるのですが、それは事前に決められた結果、あるいは目的に向かう適応のユニットであるのだ、というのがニューマンたちの、非常に鋭い批判になっています。

「行動」に対して「活動」は、不適応も含んだ行動であり、活動の組み替え、あるいは学習による活動の刷新ということが重要だという視点になります。マーチン・ルーサー・キングは暗殺された年に、アメリカ心理学会で講演をしていますが、学会で、世界不適応学会（International Mal-adjustment Association）を提案したいという話をしています。このキング牧師の演説をニューマンたちはよく引用します（図 7）。

図 7 スライド「心理学全般へのインパクト」（茂呂）

さて質的心理学に対してパフォーマンスアプローチはどういうインパクトを持つのでしょうか？このセッションは日本質的心理学会の研究大会内で開催されているセッションですので、これについて、2 点、指摘したいと思います（図 8）。

現在の社会・文化・経済状況における心の営みの質を探求するべしという格率が導かれるというインパクトがあります。社会文化経済状況と心の営みのあり方、つまり質を、質的心理学会としては考えるべきではないかと思います。

現在の私達の生活というのは、新自由主義に支配されて、数字による統治というのが、ごくごく普通の光景になっています。そういう世界に

我々は好むと好まざるとに関わらず生きなくてはいけない。質的心理学が日本で登場したとき、質に対して、どのような心理学として態度をとるべきなのか、という原理的な議論も多少行われていたような気がしています。しかし現在、数字と量化がますます強い力を発揮しているときに、質的心理学はそれに対抗する人間の見方を提示するというような議論を再開する必要があるのではないかと考えます。

2. パフォーマンス心理学のインパクト

質的心理学に対して

【現在の社会文化経済状況における心の営み質の探求の意味】
ネオリベ的数字による統治への対抗として、質的心理学はあるべきではないか？
テクニックとしての質的研究法ではなく
質心研究における方法論methodology議論の再活性化の必要

【ナラティブ論へのチャレンジ】
物象化した言語学は隠れていないか？
本質とその格納containmentという信念に囚われていないか？
因果的結合は蔓延していないか？
言語を活動としてみていますか？

図 8 スライド「質的心理学に対して」（茂呂）

質的心理学研究における方法論を再開する。手先のテクニックではなくて、方法論として議論を再開すべきじゃないか。「人間というのは何か」という人間観と人間哲学を含んだメソドロジーを再活性化する必要

があると感じます。パフォーマンス心理学は、そのようなインパクトを持っていると思います。

17:31:22 石田喜美:
（サトウ先生）　・テクニックとメソドロジーの混乱　・どのような考え方に支えられているのか、の相対化。そういう観点を忘れないようにしていきたい

今ひとつ、ナラティブ研究に対しても、チャレンジングなことを述べています。ナラティブ論は、どこか、物象化した言語学に基づいてはいないか。語りの中には、なにか、本質のようなものが格納されていると仮定し、語りと意味内容との間に因果的な結合を仮定するような、非常に古典的な哲学の病を含む言語観が、ナラティブの中に潜んでいるのではないか、という疑義です。

16:55:58 サトウ タツヤ：
いくつかの文献によれば（Hammack & Pilecki,2012；森岡，2013；Murray, 2003），ナラティブ心理学にとって重要な著書や論文は，1980年代に現れたとされる。発行順に『力，親密性，そして人生物語』（McAdams, 1985），『現実の心，可能な世界（邦題：可能世界の心理）』（Bruner, 1986/1998），『ナラティブ心理学』（Sarbin, 1986），『研究インタビュー：文脈とナラティブ』（Mischler, 1986），『ナラティブ的に知ることと人間科学』（Polkinghorne, 1988），『意味づけの諸行

為（邦題：意味の復権）』（Bruner, 1990/1999）などである。
より詳しくは拙論（https://doi.org/10.14960/gbkkg.16.2）

16:56:27 石田喜美：
ブルーナー：論理実証モード／ナラティブ・モード

最後に状況論に対してもインパクトを持つと思います(図 9)。状況論、活動理論、社会物質性研究に対して、これまでにない新しい問いを投げかけるのではないかと考えます。

2. パフォーマンス心理学のインパクト

状況論に対して

以下のような新しい観点を状況論、活動理論、社会物質性研究（社会物質的アレンジメント研究）に提供することが可能となる。
「自分ではない人物になってみること（模倣性）」
「新奇活動にチャレンジしパタン化を脱すること（脱惰性態）」
「台本に依拠しない創発活動して（即興性）」
「正解を得るというよりも様々な可能性を想像し遊ぶこと（プレイフルネス）」

図 9 スライド「状況論に対して」（茂呂）

特に、「模倣性＝自分ではない人物になってみること」、「脱惰性＝新

規の活動にチャレンジして従来のパタンを脱すること」、「即興性＝台本のない創発的活動と正解のない活動をすること」、「プレイフルネス＝様々な可能性を想像して遊ぶこと」、などのパフォーマンス概念の含意が、状況論研究をさらに一歩進めることなると言えます。

16:55:58 石田喜美：
※「社会物質的アレンジメント」について 上野直樹・ソーヤーえりこ・茂呂雄二(2014)「上野 直樹，ソーヤー りえこ，茂呂 雄二」『認知科学』 https://doi.org/10.11225/jcss.21.173
17:08:02 石田喜美:
※「パフォーマンス」と交換 北本 遼太・茂呂 雄二(2020)「「交換形態論」の再評価と 「パフォーマンスとしての交換」への拡張：学習のアレンジメント形成における感情の役割」
https://doi.org/10.11225/jcss.27.44

最後に、パフォーマンス心理学の実例、研究室の研究事例を 2 つ紹介させていただきたいと思います。

まず、広瀬拓海さんの研究事例です。広瀬さんは都内の貧困の地区に入り込んで、そこで人々がどんなふうにコミュニティビルディングをするのかを、記述的研究とともに、介入研究をするという方法で研究しています（図 10)。

図 10 スライド「広瀬氏の研究事例」（茂呂）

広瀬さんが注目したのは、公園でたむろしたり、フラフラと夜の街をさまよったりしている、そういうリスクのある子どもたちです。こういう子ども・若者たちがどういうプロセスを経て、新しいアレンジメントに出会っていくのかということを観察しています。子どもたちの動きの一方で、この 20 年ぐらい足立区で主婦グループたちも様々に子どもたちを支援しようという活動を行っているグループもいくつかありました。

新自由主義的な社会物質的アレンジメントと、社会文化経済的な環境変化の中で、リスクのある子どもたちと主婦グループが出会うことで、

貧困の子どもたちを支援する新しいアレンジメントができていくということを、広瀬さんは歴史的な解釈枠から明らかにしました。アレンジメントの変化の中で、新しいパフォーマンスが生まれるという、パフォーマンスアプローチから、子どもたちと大人の動きを見ることで、新しいタイプの活動が生まれていくというそういうプロセス切り取ることができたわけです。

この記述とともに、必要とされる支援を見極めて、子どもたちに与えるために、タレントショーを実装化して、実際動かしてみることもしている。子どもたちが自分たちで企画会議から運営をするというような、自由なパフォーマンス空間、場を作って用意することで、子どもたちの普段見せない、非常にアクティブな動きを引き出すこともできたわけです。

もう 1 つだけ研究を紹介させてもらうと、北本良太さんの研究の事例があります（図 11）。

今、社会的排除というのが状況論と活動理論の中でも注目されています。つまり様々な社会経済的な状況の変化の中で、人々は今までの学校教育のシステムの中では、そのままでは成長発達していけない、そこから排除されてしまう。そういう流れの中でどういうふうな新しいコミュニティを作ればいいのか、それは「福祉コミュニティ」と呼ばれるわけですが、北本さんは、それがいかに即興的に形成されるのかを吟味しています。とくに交換のプロセスの変化とコミュニティの形成過程を記述的に明らかにしています。

北本さんも、この記述的研究を介入研究に繋げています。就労で苦戦する若者たちを組織化して、そこで青年たちと一緒に仕事を創るという

形で新しいパフォーマンスを組織しようとしました。具体的に言えば、農福連携と言われる、障害を持った人たちに農作業の場を提供するような、仕事を生み出すことを目指して、コミュニティ造りを展開しました。若者たちとコミュニティを一緒に創ることで、若者たちは通常支援を受ける側にいますが、支援を受ける側から支援を提供する側へと、パフォーマンスの転換が可能になる。若者たちが、仕事づくりというプロセスを、ある種の遊びとして展開してみたという研究事例になります。

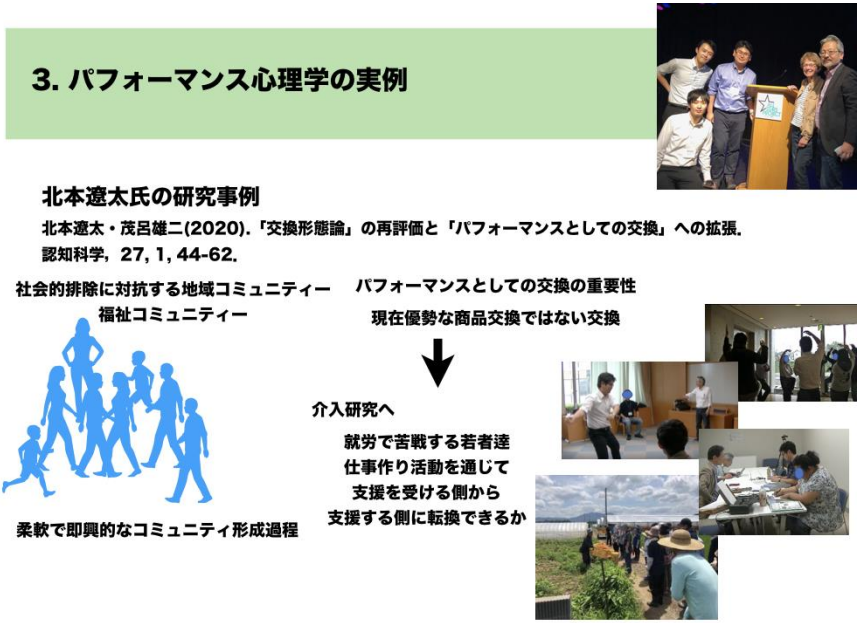

図 11 スライド「北本氏の研究事例」（茂呂）

これまで、この 2 つの研究事例で確認できるのは、パフォーマンス心

理学が、心理学をかなり手厳しく批判しつつ、同時に新しい心理学研究のスタイルというのも作り上げることができるのだということです。このことを強調しておきたいというふうに思います。

17:26:39 石田喜美:
※実践例 Hirose, T. & Moro, Y. (2018) "Socio-material arrangements of impoverished youth in Japan: historical and critical perspectives on neoliberalization"
https://www.tandfonline.com/doi/abs/10.1080/10749039.2019.1604000
17:27:55　石田喜美:
北本 遼太・茂呂 雄二(2020)「「交換形態論」の再評価と 「パフォーマンスとしての交換」への拡張：学習のアレンジメント形成における感情の役割」 https://doi.org/10.11225/jcss.27.44

まとめとしては、不十分ではありますが、パフォーマンス心理学の持つ可能性の一端というのを確認できたというふうに思います。

質的心理学においてはぜひとも、今後も「質」というものの意味を、この学会が創設された頃の熱い形の議論を、ぜひ再開して欲しいと思います。

■パフォーマンスは怪しい！

佐伯　胖（田園調布学園大学大学院人間学研究科）

佐伯：茂呂（雄二）さんや上野（直樹）さんたちが話していたようなところに、私もけっこう入ってたんですけどね。まったくもう、私は、蚊帳の外で、全然そういう議論には追い付かないような、もう完全にボケたふうになっているなということを自覚してですね。完全に私は今日ボケ老人の戯言と言うしかないんです。はい。申し訳ありません。そういうことで年を取ったなということですね。

私の話はね、「パフォーマンス」は、そもそも怪しい、という話なんですよね。

17:33:33 岸磨貴子 ：
怪しいの文字のフォントがこだわりですね！
17:33:54 渡辺謙仁:
こういうお話が聴きたかったです。

皆さんは、非常に「パフォーマンス」を賛美されているようなんですけれどもね。私から見るとね、「パフォーマンス」は、非常に怪しいんですよ。

なんで怪しいのか、というとですね。ホルツマンの『遊ぶヴィゴツキー』（茂呂雄二訳、新曜社）を、私も読ませていただいていて、本書（『「知らない」のパフォーマンスが未来を創る――知識偏重社会への警鐘」）

は、それを、かなり繰り返している面が結構あって、ですね。しかも、それをかなり、なんていうか、結論だけをパパッと言っている感じがあってですね。どうして、そこに至るかっていうことの理論的な経緯を説明しているのは、『遊ぶヴィゴツキー』なんですよね。…と、思ったので『遊ぶヴィゴツキー』をあらためて読みました。

そこで、「becoming」とか、そういったことについて語っているところを引用しました。これが、『遊ぶヴィゴツキー』の原著で「becoming」のところの、原文と茂呂さんの訳文です。

原文： “We see a glimpse of what the dialectical process of being/becoming looks like---how young children are related to simultaneously who they are and who they are not (who they are becoming) , and that this is how they develop.”
茂呂訳： 私たちは存ることと成ることの弁証法がどのようなものかを垣間見ているのである。幼児が、自分たちが誰であるかと同時に、誰でないか（どのような人になろうとしているか）に、同時に関わるしかたを見ているのであり、これこそが発達のプロセスなのである。

原文： With their caretakers young children create developmental environments that support then to do what is beyond them, to be

who they are becoming even as they are who they are.
茂呂訳： 幼児は養育者とともに、発達環境を創造する。その環境が、自分以上のことをなすことを支え、今ある自分でありながら、自分がなりつつあるものへとなることができるのだ。

ここを見るとわかるように、茂呂さんは「becoming」について、ほんの数行で言い方を変えているんですよ。「who they are becoming」のところは、「どのような人になっているのか」と「becoming」を訳している。で、そうかと思うと、そのすぐあとのパラグラフでの「who they are becoming」は、「なりつつある」っていう言い方になってるんですね。ですから、茂呂さん自身が、はっきり言って、「being」「becoming」のところを、いろんな言い方をしている。冒頭の「being」「becoming」では、「在ること」と「成ること」と言ったり、その後の「becoming」は「なろうとしている」と言ってみたり、その次の「becoming」は「なりつつある」といったりしているんですね。

で、ここがね、怪しいんですよ。茂呂さんが「becoming」の訳で揺れているなっていうことなんですね。

なぜかというと、そもそも「becoming」という言葉はね。これは、「氷が水になる（ice is becoming water）」というとき、「氷は水になりつつある」とはいうけど、「なろうとしている」とはいわない。いや、「なろうとしている」、という場合の言い方は、「becoming」にならない。「Is going to be」とか、あるいは、「trying to become」とかそういう言い方になるわけですね。

「なろうとしている」っていうのは、主体的志向性を意味しているんですね。「なろうとしている」のは誰か意志のある主体（主語）が、どこかに向かおうとしている（志向性を示している）ということを表しているんですね。

もともとの「becoming」はそうじゃない。なんか、客観的、まぁ、ホルツマンは客観的をいやがっていますがね、この「becoming」というのは客観的に、事態がどう変わっていくかについて記述している言葉なんです。つまり眺めている。対象の世界に入っていない。なっている人間、なっているもの、水になっていない。氷になっていない。氷というものがあります。それが、水というものになります。はい。「becoming」です。こういう言葉なんですよ、「becoming」は。

だけど、私はそうじゃない。私はむしろ、「なろうとしている」っていう言い換えをしたほうがいいと、正しいと思うのです。佐伯は、むしろ、「なろうとしている」という言葉として、とりたい。

学習・発達を説明しようとするならば、「なろうとしている」っていうこととして考えたい。

「なろうとしている」のは、何に「なろうとしている」のかといったら、それは、「善く」なろうとしているということだと、村井（実）の弟子としてそう言いたいわけですね。村井は、『「善さ」の構造』（村井実, 1978, 講談社）で、すべての人は「善く」なろうとしている、という。ただし、「善く」ということがどういうことかは、わからない。それは、未知性なんです。村井は、未知性ということを原点に考えている。ただ、「善さ」を、未知性のままにはしていない。

そこの未知性についてのホルツマンの考えと、村井の考えがはっきり

違うのは、村井は、「善さ」はわからないけれど、訴え合うことで相互達成される、って言っているわけですね。何が「善い」かは、二人称的関係の中で聞き合うこと、そして、訴え合うことの中で、相互に見つけていくことなんだとしているわけね。「善さ」の未知性は、未知性のままでいいんですよ、って。

それが、ホルツマンはやっぱり傍観者的に記述しているんですよ。本人は、違うかもしれないよ。でも、記述は傍観者的ですね。はっきりいって。眺めている、事態を。事態を眺めている。そこが私とはずれているね。はっきりいって。

私はある時からそういう傍観者的に語ることをきっぱりやめました。今もそうですけど。全然傍観者的に言う気はない。傍観者でいることは許せないと思うから語っているわけです。

17:36:29 AOYAMA Masahiko：
おお！ここでドーナツですね！

17:38:37 石田喜美:
参考：「学びのドーナッツ論」
https://fukutake.iii.u-tokyo.ac.jp/ylab/2014/08/post-502.html
（山内先生のブログ「状況的学習論と学びのドーナッツ論」）

それと、もうひとつね。「頭ひとつ分の背伸び（a head taller）」という言葉がね。これは、「パフォーマンス」といっているわけ。これ、はっきり書いている。ヴィゴツキーの「a head taller」、これがパフォーマ

ンスということは、ヴィゴツキーが「being a head taller than who you are」なんだ、「頭ひとつの背伸びする」ということを「パフォーマンス」と言っているんですけどね。これはね、まぁ、本当にそのことに止まっていなくて、「シアトリカル（theatrical; 劇場的）」なセンスでどんどん引っ張り込んでいる。ヴィゴツキー自身はそんなにシアトリカルなセンスは持っていなかった。そこを、ホルツマンは、非常に、シアトリカルな方向にひきずり込んでいる。そこが、私は許せない。

17:42:04 茂呂雄二 ：
佐伯先生、ヴィゴツキー の最初の、１０代の評論は、演劇評論でした。

そのことは、まぁ、放っておいて、この「頭ひとつ分の背伸び」ということに、ものすごく私はひっかかる。これが問題。「頭ひとつ分の背伸び」。

茂呂さんもね、昔は、けっこう良いこと言ってた。今も良いこと言ってるんだろうけれど、『身体の構築学――社会的学習過程としての身体技法』（福島真人編、ひつじ書房、1995 年）という本の中で、「開け ZPD」（「『ZPD から LPP へ』―開け ZPD―：レクチャーと討論」）という茂呂さんの痛快な良い論文があるんですよ。その時、茂呂さんが怒りをこめているんですよ。何に対して怒りをこめているかというと、ZPD は「教育万歳」になりがちなんだって、「教育万歳」という方向になりがちなんだ、と茂呂さんは警告して、そうならないためには、どうしたらいいんだ、っていうことを、はっきりと、結論はわからないけれど、非常に、

もがいているわけ。この論文。「開け ZPD」。だから。茂呂さんのこの論文すごく好きなんだ。茂呂さんが、こうかな、こういうと「教育万歳」にひっぱりこまれちゃうな、ってことなんだね。

だけどね、日本で知られるヴィゴツキー屋さん、戦前からというとなんですけど、この戦後といったらいいかな、問題解決型学習と系統学習が、戦後の教育の大論争になったわけですね。そのとき、問題解決学習は、本当にね、今でいう総合学習とか、そういう方向ですね。生活科の前身になるような教育を提唱したのが問題解決型学習。日常的な生活の中で問題をみつけるということは大事なんだっていう。それに対して、知識は、知識の系統があるんだから、系統を大事にしなきゃいけないといっていたのが系統学習なんですが、その論拠にね、ZPD をとりあげてたわけね。それが柴田（義松）さんもそうだけれど、ZPD というのは、なんかわかっているものが、わからないものと一緒になって、そこにひきずりあげていくことなんだという考え方で、そこを使ったのが、「水道方式」だとかなんだとか段階的・系統的な教授・学習を進めることになったんですね。

柴田さんの最近の仕事が Wikipedia に出ていますが、最近は「学習集団づくり」がテーマですね。ホルツマンたちのやっているのも、グループセラピーなんですね。そして、グループでの仕事、学習集団づくりが大切だという。これもね、ZPD の解釈としてある程度方向づけられている正統派というか、つまり、ある種の ZPD 理解ですね。ZPD を学習集団づくりとしてみなしたり、「頭ひとつ背伸びさせるんだ」、っていう言い方ね。

これは、佐藤学が「学びの共同体」論を言っているときは、そちらの

系統の ZPD 論を非常に引き継いでいるね。で、佐藤学の共同体というのは、共同体なんだ。共同体でみんなでお互いに出し合ってやるべきだ、そして、それが「真正な学び(authentic leaning)」に結びつくんだっていう。「真正(authentic)」という学びという方向づけを想定しているってこと。そして「真正の学び」を知っているのは教師であり、ちゃんと学問を鍛えた人なんだって。そちらの方向に、やっぱり、ひっぱりあげるっていうことだから。茂呂さんが、この「開け ZPD」で警戒していた「教育万歳」の方向に、やっぱり、「学びの共同体」論は、そっちにひきずりこむかのように思える。

佐藤学は、「ジャンプのある課題」といって、現段階の学力より一段上の課題解決に迫らせる、ということを「学びの共同体」の本質であるということを言っているんですね。これなんかも、「頭ひとつ分の背伸び」なんですよ。そこは、やっぱり、「望ましい姿」っていうことを、あんまり、はっきりと規定はしていないけれど、「望ましい姿」なるものをやんわりと想定して、そちらの方向に進むんだっていうことを言っているように聞こえる。そちらの方向へのファシリテーションが必要だというんですね。

これはね、ワークショップなんかでいう「ファシリテーター」の役割にやや近いところがあるんですね。ホルツマンは「ファシリテーション」という言葉をつかっていませんが、「パフォーマンス・アクティビスト」という言葉を使っています。それは一種の「ファシリテーター」ですよね。そこが、私は怪しいと思う。それは危ないと。

なぜかといいますと。ちなみに佐伯はね、保育から、発達の成長神話をね、排除すべきだと盛んに言っているわけですね。

つい先日の何かの研究会かシンポジウムで、井桁（容子）さんとの対談の記事で、まだ 12 月くらいにしかでませんが、「赤ちゃん返り」ってけっこう大事ってことを言ったわけです。つまり、わたしたちは、本当に、赤ちゃん時代をちゃんと大切にしてこなくて、無理矢理に背伸びさせられて、赤ちゃんという時代が、結局、抜けちゃってる。そこで、もう一度私たちは「赤ちゃん返り」が必要だということ、原点にかえって、赤ちゃんのような思いに立ち戻ることが大事だと言っているんです。生きている今が大事。今、生きているこの時を大事にする。赤ちゃんは、今、生きていることを満喫しているわけ。本気で。で、そこに戻ろうじゃないかっていうことを、私は言っているわけです。

「自分でないものになる」というのではなくて、「becoming」じゃなくて、「自分自身であること（being）」を大切にしましょうというのが、私は、今の日本の保育で一番大事なことだと思うんです。

それは一人称性の確立なんですよ。日本には一人称が確立していない。私は、自分が、まず、自分にならないと、なりたい自分というものは自然に見えてこない、と思う。

「なりたい自分」「becoming したい自分」というものはね、外からファシリテートされる話じゃなくて、自分の中から自然に見えてくる話なんです。見えてくるっていうことはね「中動態」なんです。中動態のことを話すと、あっという間に時間をとっちゃうので、みなさんが國分（功一郎『中動態の世界』、医学書院）さんのことをご存知だと想定します。めちゃめちゃ大事な話なんだけど、これについて説明すると 1 時間、あっという間にたっちゃう。

18:13:55　AOYAMA Masahiko：
中動態の解説 能動態の「見る」、受動態の「見られる」ではなく、自発「見える」のような動詞の用法。受動態は、中動態から生じたと考えられています。自然とそうなるという意味を持つ動詞。

18:15:10　Naohisa MORI：
「無常」「無我」。日本発の概念で行きたい。

18:16:35 AOYAMA Masahiko：
無我ではないと思うんですよ。間主観的。ほれる、というのがいい例だと思います。別に自分がないわけではないもんね。

18:19:06　Naohisa MORI：
無我というのは自分がないのではなく、あらゆるもの、出来事の実体が決まっていないということです。諸法は関係の中にあるので。諸法無我の「無我」です。

演劇のメタファーっていうことをね、ヴィゴツキーは、言っていなかったにもかかわらず、「becoming」は、「パフォーマンス」なんだと。そのことを、「パフォーマンス」は演劇メタファーですよね。そのことをホルツマンは心得て言っているわけね。

「パフォーマンス」は演じることだと。ここは、見る/見られる世界に放り込むことなんですね。見る/見られることを前提にしたことを、私たちは本当に前提にしていいのですか？って、私はあえて、言いたい。パ

フォーマンス主義者の人たちに。見る/見られる世界に放り込むことは、成長につながることになるんですか？つまり、自分を三人称化してみるわけですね。そうすると、「こうありたい自分」より、「よく見られたい自分」になろうとしてしまう。これはね、私としては発達の歪みになると思う。「よく見られるわけじゃないんだ」っていうなら、それは、自己内対話になっちゃう。それは、「よく見られたい」が三人称的で、そうでないというと一人称的自我ばかり。何が抜けているかというと二人称がない。関わる対象との二人称的関わりがない。そして、本人自身が二人称的に関わる自己をつくるということ。二人称的に関わる存在になるためには、まず、一人称ができないとだめなんですよね。

17:47:27 AOYAMA Masahiko ：
ホルツマンの becoming は､being を含んで一人称的であるように思いますね。わりと佐伯先生と同じような。

17:47:45 岸磨貴子:
そうです！ホルツマンの becoming は､being をふくめています！なので、会話でしっかり抑えていければいいなって思いました！

17:48:47 石田喜美
岸先生、青山先生
being と becoming の弁証法的関係のあたりですよね。茂呂先生に一度、お返しして、『遊ぶヴィゴツキー』の訳語の選び方と関連してお話をおうかがいするのが良いように思いました。

そういうことは置いておいて、演劇のパフォーマンスというのは、演出家が必要です。演出家がいますよね。ホルツマンは、それを「パフォーマンス・アクティビスト」と言っていますがね。これ、実質的には「ファシリテーター」なんですよ。

わたしは苅宿（俊文）さんのワークショップ・デザインで講演したことがあるんですが、そこで「ファシリテーター」という人から、「ファシリテーションってどういうことしていいのか、本当に迷っているんですよ」っていう話があった時、私は、こう言った。「ファシリテーションをするな。ファシリテーションをしないで、本当にワークショップの時にどこにも属さず、陰で、なんかなんとなく、ぼーっとしている人がいたら、その人のことを、心にとめようじゃないか。その人のことを心にとめる。何かしてあげるんじゃない。心にとめておくと、その子が、ちょろっとなんか始まったなって思った時に、寄っていって、『それいいね』って言うことが、私の考えるファシリテーターだ。それはファシリテーションしようとする思いを、まず消すことなんだ」って。

それを、私は、ワークショップ・デザイナーのファシリテーションに言っているんですね。それは二人称的に関われることを、ちゃんとやらないとだめだよ、ということを言っている。

17:49:58　AOYAMA Masahiko：
インプロはこういう意味でいう二人称なんですね。それが三人称として誰かに見られる前にありそうです。

17:51:55 岸磨貴子:
そうなんです。インプロって、自分でやっておもうのは、まず、一人称を少し出すんだけれど、安心安全に二人称的な関わりがうまれて、なりたい自分をみつけていけんですよね～！

17:52:42　山口（中上）悦子 ：
一人称と二人称が安心できるのは、三人称があるからではないでしょうか。ペアで演技するときも、その間に三人称が現前するようなやり方をする。10 秒待ってゆっくり話をするとか。

17:53:31　岸磨貴子:
悦子先生＞そうだと思います！warm audience ですね！このあたり、えつこ先生、ぜひそれで会話しましょう！

17:53:47　山口（中上）悦子 ：
三人称は具体的な人でなくても良くて、いわゆる身体ですけれど。

18:04:55　園部 友里恵 ：
貴重なお話をありがとうございます。インプロを実践・研究(ホルツマン派ではないですが)からみると、becoming は「なろうとする」「なりつつある」というより「なってしまう」という感じで私はインプロにおける becoming を捉えているな、と感じました。

18:05:39 渡辺貴裕:

私も、園部さんおっしゃるようなイメージですね。演じることにおける becoming。

18:05:50 茂呂雄二 ：
園部先生、ぜひ、声を出して、お願いします。

18:15:25　石田喜美:
＞園部先生 わたしも「できちゃった」という感じで becoming を捉えています。 この感覚を言葉の学びの文脈でとらえたくて、全国大学国語教育学会で、「国語教育における即興的パフォーマンスとしての学習―「うまくいかない」「できちゃった」から生まれることばの学び―」」というラウンドテーブルを開催しました。
https://kimilab.hateblo.jp/entry/2018/09/18/152457
ここでのキーワードは「できちゃった」です

18:16:19 園部 友里恵 ：
「できちゃった」は少し違うんです、「なっちゃった」なんです。「できる」「できない」ではない感じです

18:17:27　渡辺貴裕:
本書のなかでも、ホルツマンは、ヴィトゲンシュタインをふまえて、次のように述べていますね。 「私たちは，自分が話すときに考えていることや感じていることを表現するのではありません。私たちはしっくりくる言葉を探し，それから話すのではありません。話すことは，

対応する物質的また心理学的な何かを見出すことではありません。私たちの内面を外部に出力することではないのです。」（第 3 章）
「私たちはしっくりくる言葉を探し，それから話すのではありません」の話は、佐伯先生のおっしゃる話、あるいは太田先生の事後性の話とも重なってくると思うのですが、それでも佐伯先生が引っかかる点がどこなのかは、気になるところです。

18:17:58　石田喜美：
＞園部先生 たぶん、言葉の学びなので「できちゃった」というタイトルにしたんだと思います。 「できる」「できない」という能力的な概念は入れたくなかったんですが、そのあたりについては、「良い方向」的な考え方を入れざるをえなくなった感じですね　現場にいるわたしたちのかんじかたとしては「なっちゃった」でした。

18:25:41　茂呂雄二 ：
渡辺先生　「私たちはしっくりくる言葉を探し，それから話すのではありません」の話は、佐伯先生のおっしゃる話、あるいは太田先生の事後性の話とも重なってくると思うのですが、それでも佐伯先生が引っかかる点がどこなのかは、気になるところです。ぜひここをぶつけてください

「パフォーマンス」というのは（フレド・）ニューマンのソーシャルセラピーから始まっているんですよね。セラピーって治療なんですよ。なんらかの意味で。なんか生きづらさを抱えている人から、生きづらさ

をのぞいてあげる（治療する）ことなんだ、ということですね。そうだとしたらね、これは、茂呂さんが言った「開けZPD」の「教育万歳」化に紙一重なんですよね。だから、セラピーは教育じゃないと言いながら、教育でもセラピーはできちゃう。

で、しかも、もっとね、もっと怖いのはグループセラピーなんですね。日本はグループといったら同調圧力なんですね。さきほど「学びの共同体」というのが流行っていることに触れたけど、日本人に「共同体」意識をもたせたら、途端に自分がなくなっちゃう。本当の主体性が育っていない日本社会で、共同体っていうのが大事だといったら、もう、あっという間に、一人称（自分というもの）が消えてしまうんじゃないか。それが怖い。

そういったことで、同調圧力に頼って教育してしまうのは、「ヨコミネ式（教育法）」もそうですが、これに嵌っちゃうことを、私は非常に怖いことだと思い、「その怖さを、皆さんはわかっているかね」と、あえて言いたいね。蚊帳の外から。

で、ホルツマンのパフォーマンスには、ニューヨークの黒人社会のかっこよさの匂いがする。いろんな例が挙がっているのをみると、私は映画で、エディ・マーフィーの映画が出てきた時のショックは、自分のものすごく記憶にあるんですよね。彼流の身ごなし、黒人社会の実に気楽で本当に冗談をいう、下品なことをいう、本当に枠にとらわれない、それがね、エディ・マーフィー風の身ごなしでそれ以前の黒人の映画にでてきたのはシドニー・ポワチエで、ハーバード出身のような（本当かどうかわかりませんが）顔をして、非常にエリート社会の代表となって黒人だったシドニー・ポワチエは、エリートの格好をした俳優だった。黒

人の映画にでてくる黒人として、シドニー・ポワチエが、割とモデルになっていて、そんな時に、エディ・マーフィーが出てきて、「なんだこりゃ。これは、傑作だ。おかしいな。めちゃくちゃ、面白い」と思いました。それはね、ホルツマンの「パフォーマンス」に魅かれる理由もね、エディ・マーフィーの風の匂いがあるね。ホルツマンには。だからそこに魅かれているんじゃないかと。

17:48:27　茂呂雄二 ：
貧困、ネオリベ、マイノリティーといったリアリティーはどうしたらいいのでしょうね？

17:51:38　AOYAMA Masahiko ：
ソーシャルセラピーは、やはりアメリカのダイバーシティを基礎にしていますね。なるほど。

「Creating unknown」の話がありますが、芸術の世界では当たり前の話。新しいことでもなんでもない。それはさっきからいっている、國分（功一郎）の『中動態の世界』（医学書院）を読むと、その話は、いっぱいでてくる。私は保育というのは、「中動態」でなければならないと以前からい言っている。対象世界に入り込み、そこに巻き込まれることが大事で、巻き込まれても自分を見失わない、強靭な自己を確立することが大事ですね。

17:57:08 Naohisa MORI ：

「贈与」とかどうでしょう。大澤真幸も使っていた概念だと思いますが。近内悠太(2020)『世界は贈与でできている――資本主義の「すきま」を埋める倫理学』NewsPicks パブリッシング
「贈与」が何であるか、何になるかは二人称的にしか達成されない。相補的関係。

17:58:54 AOYAMA Masahiko ：
贈与と近いことを、ニューマンはギブとゲットというように表現していますね。

17:59:46 Naohisa MORI ：
「ギブ」がなりたつのは「ゲット」あってこそということ?

18:00:05 AOYAMA Masahiko ：
ううん、ゲットを求めずギブしまくれという話。

18:00:17 茂呂雄二 ：
森さん、青山さん　再掲ですが、北本 遼太・茂呂 雄二(2020)「「交換形態論」の再評価と 「パフォーマンスとしての交換」への拡張：学習のアレンジメント形成における感情の役割」ご覧ください。

18:00:39　石田喜美:
青山先生がご指摘いただいた点については、フレド・ニューマンほか(2019)『みんなの発達！』（新曜社）に記載されていますね

18:00:50 Naohisa MORI ：
ギブとしてやるのは偽善。「贈与」の観点からすると。

18:01:17　山口（中上）悦子 ：
大澤が贈与に関して「世界史の哲学」で述べていたのは、「第三者の審級」が成立しているもとで贈与一返礼が成立すると言っていたと思います。つまり、「第三者の審級」が「第三者」として機能している。

18:03:03　Naohisa MORI ：
いえ、第三者の審級が成立するのは、「贈与」と「略奪」があるからです。順序が逆。（身体の比較社会学）

18:11:00 石田喜美:
Shiroma, S., & Moro, Y. (2011). Art and network in and around school: Re-organization of community association through traditional art activity. Paper presented at International Society for Cultural and Activity Research Congress Rome 2011. September 8, 2011 at Rome Sapienza University.

■パネルトーク

岸：佐伯先生にたくさんの会話のきっかけを作っていただきましたので、さっそく、会話を始めましょう。茂呂先生から始め、渡辺先生、それから、パネリストの皆さんに、自由に会話にご参加いただきます。

茂呂：はい。先生のご指摘、非常に久しぶりに「佐伯節」を聞いたなという感じですが、ひとつ言いたいのは、ヴィゴツキーはかなり、演劇的な人だということです。10 代に初めて出版というか、私家版みたいに出版したのは、演劇評論です。

　かなり当時の演劇世界を見渡していて、10 代でありながら、ものすごい、素晴らしい評論をしているというのがあって、また 1926 年だったかな。1926 年かな。26 年に、あの 2 代目の左團次が、歌舞伎公演でモスクワに行ったんですが、その左團次を見た感想というのを、日本と当時、モスクワ大学を訪問した日本人に伝えているとかですね、様々な演劇的なエピソードはありまして、ロシア語で言うそのプレイというのと、一方のパフォーマンスに、パフォーマンスと演劇に引きつけて解釈したのは、それほど悪い線ではないのかなというふうに私は思います。

佐伯：了解。はい。

茂呂：それとあと、二人称的な、というお話ですが、ソーシャルセラピーも含め、アメリカのリアリティというのか、私も最近この 10 年ぐら

い足立区の貧困の子どもたちとか、引きこもり系の就労に苦戦している、若者とかですね、そういう方々とお付き合いしてると、この社会の中で、包摂されていないわけです。そういう人たちに向かい合うということを考えると、ホルツマンたちのアプローチはリアリティを持ってます。

特に、ニューヨークの黒人たちの身振りを、多少でも変えようと、身ごなしを変えようというのは、やはりそのリアリティに支えられたものなのじゃないかなということを感じたりしています。まずは私からそのくらいで、どうぞ。

岸：ありがとうございます。ここで、渡辺先生に演劇の話も含めて会話していただきたいです。佐伯先生のお話にあった「becoming」について「なりつつある」というのは、傍観者的眺めであるという指摘がありました。そうではなく「なろうとする」というのは、一人称で主体的志向性があると。演劇と教育を研究されている渡辺先生は、「becoming」について、どう捉えられていますか？

渡辺：はい。すごい振り方でやってきて、かなりドキドキで、どうしよう、っていうのが正直なところなんですけれども…。

佐伯先生の主張に対して、なんというか、反論はできると思います。例えば、パフォーミング、演じるっていうことを、「見る/見られるを意識させるから」ということで、ある種、三人称的に捉えられたのかなと思ったのですが、おそらくホ、ルツマンが考えているのはそうではないですし、演劇、パフォームするということ自体が持つ可能性としても、そうではないだろうと、私自身が演劇のことをやってきて思います。必

ずしもディレクターによって指示される形で演じるのではなくて、むしろ、その場の中に身を置いて、他者と関わることで、自分の中から何かが引き出されていくような感覚。それが「演じる」ということにはあると思うので、そこは、違うだろうなっていうのは思います。

あるいは、ニューマンのソーシャルセラピーに対して、グループセラピーとなぞらえる形での批判もありましたけれども、多分それは、いわゆる、「セラピー呪縛」に囚われている「セラピー」の捉えに基づいてのソーシャルセラピー批判かなと思いますが、おそらくニューマンがやっていたソーシャルセラピーは、そういうものとはちょっと違う。むしろ、セラピーを求める人を取り込むために「ソーシャルセラピー」と名乗ってはいるけれども、やっていることは、全然、「セラピー」っぽくない、もっぱら会話のやりとりであるというのを、私自身イーストサイド・インスティテュート（East Side Institute）でいろいろな話を聞く中で感じたことです。

…というふうに、個別の論点に反論はできるのですが、一方で、私としては、佐伯先生のお話は極めて痛快で、私自身が抱いてきた感覚とすごく通じる、私が感じてきた違和感を、ひとつの形にしてもらえたように感じたんですよね。

というのも、佐伯先生がおっしゃる「二人称的関わり」云々が、世界の捉え方という話にとどまらず、まさに我々がどうあるかを問題にするものだからかと思います。

私、教育方法学者として最近考えていることがあって、先日も「教育方法学者の実践性」をテーマに、教育方法学会の課題研究でしゃべったのですが、傍観者的な立ち位置ではなくフィールドの中に飛び込んでと

いう場合でも、我々はともすれば、客観視する捉え、対象化する構えみたいなものから離れられないんですね。パフォーマンスを打ちだし、現実に働きかけていくことを重視したホルツマン自身にもそれは言えるかもしれないし、さらに、それを他の人が取り上げて、本を通して捉えて、論じて、それを研究に生かして、となると、元は曲がりなりにも最小限に抑えられていた傍観者的な構えが増殖しているのではないか、と感じる部分があります。

　そんなわけで、佐伯先生のお話、すごく痛快に受け止めました。この痛快さはいったい何なんだろうか、というところから、さらに議論を発展させたいところですが、ひとまず私からはこれで。

岸：ありがとうございました。他の登壇者の先生方もカメラをオンにして、佐伯先生が私たちにくれた会話をきっかけとして、茂呂先生、渡辺先生に続いて会話にご参加ください！悦子先生どうぞ。

山口（中上）：そうですね。先生がおっしゃった、「becoming」「傍観者的眺め」のことなんですけれども、「なろうとしている」は正しい訳ではないだろう、と「なりつつある」は…

佐伯：「なりつつある」はおかしいって言ってるわけ。

山口（中上）：逆でしたね。「なろうとしている」。

佐伯：それ、それが正しいんだよ。

山口（中上）：そう、「なろうとしている」っていう訳の方が

佐伯：いいんじゃないかって。

山口（中上）：ありがとうございます。

「なりつつある」という言葉は、自分でも使いながら、「これでいいのかな」って疑問に思っていた部分があったので、この「なろうとしている」という言葉の方がピタッときました。

例えば、医療安全の仕事の中で、継続的質改善、企業なんかでやるトヨタで有名な「カイゼン」を職員に指導する場面があります。そこでは、「まず、自分たちの今ある状態を、きちんと把握しなさい」と言うんです。自分たちの今がちゃんと見えたら、「次はどんな風になりたい？」「そのために、どういう活動をしたらいい？」と考えさせます。そのとき、この「(職員があるべき姿に) なりつつある」と言ってしまったときに、職員が「あれ？」「ん？」ってわからない顔をするので、「やっぱりこの『なりつつある』という言葉がピタッと来ないのかな」と、感じていたものですから。「(職員が自分たちのなりたい姿に) なろうとしている」って伝えた方が、きっとすっきり落ちるんじゃないかなと思いました。

また岸先生、よろしくお願いします。

18:20:25　山口（中上）悦子:
最初、growing という言葉に抵抗があったのです。めざすところがあって、絶対にそうならなければならないという。医学で日本語訳の成

長というと決まった時までに決まった状態・レベルに達成すること、体重や「発達段階」っていう意味なんです。ただホルツマン先生と話をすると、そうではなかった。日本語と英語の差ですかね。

18:21:19　AOYAMA Masahiko：
たしかに grow って使いますよね。あんまり成長の先行きが明確じゃないのかも。

18:21:49 山口（中上）悦子:
grow-ing の ing の本当の意味を日本語では表現できないんじゃないんだろうか。
18:22:54　AOYAMA Masahiko：
そうですね。ing は「している」だけでなくて、継続中っていう意味とか、含みが広いですよね。

18:23:45　開始 山口（中上）悦子:
なんか場外乱闘やりたいですね～時間が足りないかも＝

18:23:47 石田喜美:
grow, growing の話が出てきたので、「そんなに出てきたかな・・・」と思って索引を調べてみたところ、かなり出し方を選んでいる感じがしました。
【索引より】
成長すること xi, 19, 26, 37,138

成長の創り手 17，116

岸：なるほど！悦子先生のお話を聞いて、私たちは「なろう」と思って becoming するというより、実際に誰かと関わったり、何か活動に取り組んだりする中で、関係論的に「なりたい自分」が生まれてくるのかな、と。実際、この場でも、私は最初から話したいことを持っていたわけではなく、佐伯先生や悦子先生と話をする中で、話したいことが生まれてきています。話す前と話した後の私は、違います。話し、関わる中で「これについて知りたいな」「それに挑戦したいな」「これについて自分なりの考えを持てるようになりたいな」という私に、なっていく。つまり、関わりの中で、「なろう」としたり、「なりたい」自分が生まれたりしていますね。

山口（中上）：そうなんです。すみません。ちょっとだけ補足させてもらうと、「なりつつある」っていうのは、誰かから見て「なりつつある」かなんですよ。子どもが「立っち」ができて「あんよ」ができて、だんだん大きく「なりつつある」ねっていうのはわかるんです。だけど、職員に教える場合は、「なりつつある」だと、やってる本人である職員自身ではわからないわけですよね。「なりつつある」だと、活動している人以外の人がする「監査」になっちゃう。

佐伯：うん。

山口（中上）：だから、ピンときてなかったのかな。でも、「あなたがや

りたい自分の仕事、なりたい看護師、検査技師、事務職員・・・は、なあに？」って言わせといて、「そこに、『なろう』としているかどうか、自分たちで評価してみよう」だったら、職員は理解できると、そう思うんですね。

佐伯：うん。

山口（中上）：っていうところで、「なろうとしている」のほうが、きっと、ピタッとくるんだろうな。つまりそれは一人称的？なんですよね。「なりつつある」は、佐伯先生がおっしゃるように、三人称的だっていうのが、すごく理解ができたってことです。

岸：言葉は世界を理解するレンズであると考えると、「becoming」に対して「なりつつある」と「なろうとする」のどの言葉を使うかによって、見えてくる世界が違ってきますね。

佐伯先生のご発表に「頭一つぶんの背伸び（a head taller）」に対するご指摘もありました。これについて、私も会話に参加させてください。

私が佐伯先生と関わるとき、渡辺先生と関わるとき、悦子先生と関わるときで、「こうありたい」自分は違っています。つまり、関係性の中で「なりたい自分」が立ち現れてきます。それは佐伯先生がおっしゃった「ここは未知なんだ」ということですね。最初から到達すべき（なるべき）ゴールがあるわけではないです。だからこそ、系統学習みたいにゴールを事前に決めるのではなく、関わりで拓かれていく。関わりは目的的ではなく、弁証法的。関わりを通して、未完の未来が生まれる。本

書の副タイトルを「未来を創る」としたのはそのような議論がありました。

パフォーマンス・アクティビストについて、私は、私たち一人ひとりが、関係性を（リ）デザインする場を創っていくことだと理解しています。例として、私が関わる難民の事例を共有させてください。

難民の人の中には、自分たちのことを「難民だから」「支援される対象だから」「自分にできることはない」「社会的脆弱者だから」と思い込んでしまい、体も心も動けなくなる人がいます。そこで、ホルツマン先生たちのチームをはじめ、ギリシャなどでは、彼らが難民としてではなく、新しい関係を生み出せる様々な場をつくっています。そのひとつが、舞台演劇や展示会などです。そこでは、彼らは、難民ではなく、一人の役者として、一人のアーティストとしてホストコミュニティと関わることができます。そういう中で「君が喜んでくれるなら」と自分からホストコミュニティのためにしたいこと/できることを提案したり、行動を起こしたりしていました。そういった場を自分たちのパフォーマンスで作り出していくことが、パフォーマンス・アクティビストかなと私は解釈しています。

佐伯先生の「becoming」についてのご指摘は、実は、ホルツマン先生ととても似たところかなと思いました。先ほど、青山先生がチャットの方にも書かれていましたように、「becoming」の「-ing」は、常に変化の可能性だなと。ホルツマン先生たちは「Yes, and」とよくおっしゃるのですが、「Yes」は今のあなたをまるごと受け入れると同時に、「and」で関係論的に一緒にその可能性を開いていこうということで、それが「a head taller」なのかな、と。

ここで、礼穂先生の話を聞きたいと思ったんですが、いかがでしょう。

石田：岸先生。園部先生がコメントを下さったので、もしよろしければ声を出して会話に加わっていただけるといいな、と思ったんですが、いかがでしょうか？

岸：そうですね！では、先に礼穂先生にお話いただいて、園部先生の声を聞かせていただきましょう。

太田：たぶん、あの園部先生からお話いただいた方がいいかなと思ったのですが。

岸：チャットのコメントを私はまだ読めていないので、園部先生のコメントを読む間に、太田先生に先に進めていただこうと思ったのですが、そうですね。では、園部先生お願いします。

園部：失礼いたします。園部と申します。「becoming」という概念に、すごく関心を持ちました。

私自身は、インプロをずっと実践しながら研究しているっていうところで、続けてきておりまして、佐伯先生のおっしゃる、「なろうとする」こととと、「なりつつある」ということのお話がすごく興味深かったです。二人称的という話があったんですけど、私自身は「becoming」という言葉を聞いたときに、何か、こう、自分が、主体的に、何かに「なろうとしている」っていうよりは、何か、その、関係の中に身を置きなが

ら、自然にそう「なってしまっている」っていう――そういう捉えを、私自身は、インプロ実践の中でしてきているなと思って。そのあたりのところを、チャットに書かせていただきました。拾っていただいてありがとうございます。

岸：私も今、実際にインプロをするとき、何かに「なろう」とは考えておらず、やりながら「なっちゃった」「できちゃった」という感覚を持ちます。「なろうとする」というより「なってしまう」というニュアンスがぴったりだと思いました。

佐伯：ちょっと介入させていただきますけれども。そのことが、実は、中動態ということ。動詞のね、中動態。する/させるでもなければ、してもらうでもない。中動態。それが、「なっている」「なっていた」ことが、後からわかる。後からわかる良さ。つまり、「自分がこうなっていたんだな」っていうね、それは中動態なんですね。

その中動態っていうのは、私は、保育の本質だと思ってるわけね。つまり、どうこうさせるのでもないし、してもらうわけでもない。何か、今、自分なりに、本当に良かれと思うことになっていたときに、あるいはなんだかわかんないけれども、「面白い」「面白そうだ」とかね。「これって、なんか面白そうだな」っていう、「…そうだな」みたいな世界に我が身を入れたときに、結果的に、どうこうなってるっていうのがね、そうなる。でもそれはね、芸術家は、みんな、そうなのよ。

私は、小鹿良太って、私の教え子だよね。彫刻家になったのがいるけれども、彼は、大理石を目の前に、塊を目の前に見るとね。大理石の方

からね、「こういうふうにしてほしい」という声が聞こえてくるっていう訳ですね。それに従っていると、大丈夫。結果的に像っていうのはできちゃうんだと。

でもその話ね、彫刻家に言うと、みんな、そうだって言うんですよ。はじめからね、これを作ろうと思って作る人はあんまりいないってわけね。結果的にできちゃっているっていうわけね。中動態という世界は、そういう世界なんですけどね。そういうことを、やっぱり芸術って、創作活動がみんなそうなんですけれども。私たちの活動も本来はそういうもので、それを大事にしましょう、ということを、私は保育の世界で言ってきてるんだけどね。

私、ホルツマンが「未知性」ということの解釈を、一生懸命言っているのをね、これは、もう芸術の世界じゃ、当たり前の話を一生懸命言ってるなっていう感じで。中動態ということがわかれば、何でもないことだというふうに思いました。はい、以上ですね。

18:12:26　石田喜美:

「becoming は「なろうとする」「なりつつある」というより「なってしまう」という感じで私はインプロにおける becoming を捉えているな、と感じました。」について、これこそ「中動態」ではないか？
芸術家は「はじめからこれを創ろう」と思ってつくっていない。結果的に「できちゃった」。

18:13:45 山口（中上）悦子:

なりつつあるは、先が見えてる。なろうとするは先が見えないけれど、

自分のイメージはあるから進んでいく、ってことか。芸術家はそうですよね。たしかに。

岸：インプロの中で、私たちは関係の中で「なっちゃった」を経験しますが、同時に、それを見ている人たちも、ともに、場を創りあげているんですよね。「自分もやってみたいな」「挑戦したいな」と思ったり、そこで生み出されるものに感動したり、そのように感動する自分と出会ったり。そう考えると、パフォーマンスを通して、たくさんの人の関わりが生まれ、個と場が共に変化し、成長していくのですね。

「A head taller」について、礼穂先生お願いします。

太田：はい、ありがとうございます。私も何かいろいろ考えさせられて、うまく話せるか、まったく、先行き不透明なんですけれども。「a head taller」の話を私が初めて聞いたとき、私は比較的「なるほどな」というふうに思ったんですね。

というのは、なにか人の「わかる」っていうことを考えていくと、「わかってる」状態と「わかってない」状態があるんじゃなくて、何か、さっきのインプロの話じゃないんですけれども、やっていく中で、なんか「できちゃった」みたいなことって、けっこうあるな、と思うわけですね。心理学的な研究の文脈に身を置いていると、その子どもが、どれくらい、何ができたのか、っていう議論に終始してしまうんですけれども、そこも大事なんだけどもそれだけじゃなくて、人と一緒にやる中で「できちゃう」っていうことが、大事なんじゃないでしょうか。その意味で、さっきのインプロの話がまさにそうなんですが、言葉として「a head

taller」っていうのは、しっくりくるかなと思うんですね。

ただ、佐伯先生がおっしゃった通り、本当に何かこうレベルみたいなものがあって、「頭一つの伸ばさないといけない」みたいな、そういう強迫的なニュアンスがあるというのは、確かにそうだなと思いました。

そういうとき、「ちょっと考えなきゃいけないな」というふうに、切に思ったのは、佐伯先生が中動態とおっしゃった言葉。私が、これを、どう考えているか、なんですけれども。基本的に、人間が「私である」ってことを認識するためには、「事後性」というのが、けっこう、大事なんじゃないかなと思うんですね。

佐伯：そうそうそう。本当そう。

太田：つまり、何か一緒にやっていく中で、「私」っていう強烈な個があるのはもちろん、持っているんですけれども、なにか一緒にやっていく中で、「あれって、こういうことだったのね」って、「事後性」の中で認識するっていうことが、けっこう起こっていると思うんですね。

私はもともと記憶する・想起するっていう現象についての研究を行っていたわけなんですけれども、想起するっていうのは、何かターゲットをしっかり覚えていてそれを一生懸命思い出しているっていうよりは、後から作り上げるっていう面も、やっぱりあったりするわけですね。

そういった意味で、その「事後性」を、どうやって我々が関係性を通じて、もしくは持ちながらですね、「私っていうのは一体何なのか」をいかに理解するのか。協働を通じて個体化し、そこからさらに協働するみたいな、そういうプロセスについて考えていけたら面白いのかな、っ

ていつも思っておりまして。

すごく何かちょっと脱線しましたけれども、私は「a head taller」っていうものを「なんかできちゃった」という感じで捉えています。ただちょっと言葉から、なんていうか、いろんなものが漏れちゃう。パフォーマンスもそうですけれども、パフォーマンスって、いろんなニュアンスが入っていますので、ややこしいな、難しいなというふうに思っています。すみません、こんなコメントで。

岸：礼穂先生、ありがとうございました。佐伯先生と礼穂先生の会話にもあったように、「変わっていくことが良いことなんだ」といった価値観が共有されてしまうと、先ほどの会話ででてきたように、圧力みたいなのがかかってしまいます。

私の実体験を共有させてください。ニューヨーク行く前、私はゼミの学生たちとインプロをやっていました。その中で「インプロを通して何が変わったのか」の圧力をかけていたように思います。それに気づいたのがニューヨークでのホルツマン先生とのセッションでした。全体で会話する時に沈黙が生まれると「何か話さなきゃ」「沈黙はだめだ」「せっかくニューヨークにきたんだから時間を無駄にしちゃいけない」という意識が働いていました。そんな時、ロイス先生が「なぜ沈黙を恐れるの？」というのです。「ああ、そうか。私たちの選択肢は、A か B かではなくて、もっと開かれているもので、C—会話しなくても快適に過ごせる、でいいんじゃないか」と気づきました。変化したか/変化していないか、ではなく、そこに他の選択肢をつくって良いわけですね。ニューヨークの経験を通して、自分が自分で「参加しなきゃいけない」「しゃ

べらなきゃいけない」「からなきゃいけない」圧力をかけているところに気づき、変化を前提とするのではなく、もっと「いま、ここ」をただ楽しむだけでいいのな、と思うようになりました。

青山：ひとつ補足していい？

岸：はい。お願いします。

青山：成城（大学）の青山です。佐伯先生がさっきおっしゃっていた系統学習の話を聞いて、「あー、なるほど」と思ったんですけど。えっとね、ホルツマンが面白いことを言っていて、「Developmental Stage」って、「発達段階」じゃないですか、ふつう、訳すと。

佐伯：うん、うん。

青山：「発達段階」っていうと、決まった段階を踏んで発達するっていうのはふざけんなっていうのを、ホルツマンも言っていて。そのために、私が考えるのは、「Developmental Stage」は「発達のためのステージ」だと。つまり、演劇なんで、「ステージを創ることによって発達するんだ」みたいなことを言っています。だから、さっき、佐伯先生がおっしゃっていたような、その、「向かっていく１箇所がある」っていうような発達っていうのは、やっぱりホルツマンも嫌がっていると、僕は解釈しています。

佐伯：それは、私もわかってますよ。ホルツマンは、本の中で、そのことはね、言ってるから。そこは、了解しているつもり。はい。ただ、だけども、世の中、あのとき話したのは、世の中の人は……。

青山：はいはい。

佐伯：特に、日本のね。日本のソヴィエト学者たちは、

青山：うん。

佐伯：そっち系のものとして、ずっと解釈してきてしまっている、っていうこと。

青山：そうです、そうです。ありがとうございます。

岸：青山先生、補足ありがとうございます。大事なところを確認できました。「Developmental Stage」を「発達段階」と解釈するのか、「発達のためのステージづくり」とするかによっても、捉え方・解釈が違ってきますね。私たちは後者の捉え方をしますが、佐伯先生がおっしゃるように「一般的には前者のように捉える傾向がある」というのも、事実としてありますね。訳者として、私たちも言葉に気をつけていかねば、と思いました。

　残り 10 分ですね。どのあたりにいこうかな。

では、最後に、「unknown」について会話をしたいです。これについて、

茂呂先生から、ちょっとスタートをしてもらえますか。茂呂先生の方から、「unknowability」について、会話のきっかけをつくっていただきたいです！

茂呂：あまりきっかけにならないんですけど（笑）。

岸：ウフフフフ（笑）。

茂呂：考えていたのは、ヴィゴツキーはあの、スピノザ、スピノチストなんですよね。

なので、そもそも、「人間は、そんなにたくさんのことは知ってないよ」っていうのを、ベースにヴィゴツキーの中にも、あるのではないかと思います。なんだろうな。結果は知ってるけど原因はほとんど誰もわからないっていう、そういうところで、「目が見えないままうろちょろしてる」という状態を、ですね、ヴィゴツキーの中に見出したい。あまりヴィゴツキーは、啓蒙主義なので、そういう匂いを出さないんですが、むしろ、そういうふうに、スピノザ、スピノチストならば、スピノザらしく。そう。「原因を、ほとんどの人は知らないですね」っていう、そういうことで、人々のことを考えてもいいんじゃないか。

ちょっと、きっかけにも何にもなっていませんが（笑）。

岸：ありがとうございます（笑）。

ホルツマン先生が「Unknowability」という言葉を使った時、衝撃を受けたのを覚えています。「Unknown（知らない）」は「ability（可能

性)」なんです。私は、知らないことを、恥ずかしいことだと思っていました。学校で先生が「これについて知っている人？」といって手をあげられない自分を恥ずかしいと思いましたし、誰かとの会話で知らないことがでたとき、知ったフリをしてしまうこともありました。しかし、「Unknown（知らない)」は「ability（可能性)」であるという概念と出会い、会話を始められるようになりました。それは、人と関係をつくれるようになったこととも関連しています。知らなくても、発言したり、その一部でも声にしたりすると、誰かが拾って、会話を完成させてくれるからです。人を頼って会話できるようになりました。「知らなくても、きっと、佐伯先生は、そのまま、つなげてくれるな」、「渡辺先生は、きっと追加してくれるな」と信じて、会話を始められています。

知っている人だけが発言できるのではなく、誰もが会話に参加できる場づくりを楽しめるようになりました。授業の進め方もずいぶん変わりました。これまで、「質問ありますか」「意見ありますか」と学生に問いかけていましたが、今では「誰か、会話のきっかけをつくってください」と言います。それについて、意見や知識がある/ないを重視するのではなく、「知らない」ことから未来を創っていくことを、重視するようになりました。

新原先生、どうでしょうか！そしてこれに関する章を担当されている山口（中上）先生にいきたいと思います。

新原：私も、ホルツマンの話に触れ始めるのと、インプロに触れ始めたのは、ほぼ同時期で、おそらくホルツマンもインプロとか演劇っていうものを、かなり長い間、実践しながらそれにインスパイアされていろん

なことを考えてきたところがあるのかな、ということを思っていて。けっこう、表現としてインプロを突き詰めた人たちのワークショップに行ってみると、何て言うんでしょ、こう、即興的に何かをするっていうことは重視しながらも、でもけっこうそれが、何て言うんでしょうね、言い方が難しいんだけど、「本当に、自分から出てきたものなの」っていうことを、すごい重視するところがあるな、というふうに思っていて。何て言うか、それがあの、「習慣とか、慣れで、言っちゃってない？」っていうところに、すごい、放り込まれるんですよね。

なんかそういうことを考えると、やっぱり、佐伯先生が、先ほど「演劇的なメタファーっていうのは適切だろうか」っていうことをおっしゃっていたんですけれども、それは「演劇をどうとらえるか」っていうことだと思っていて。なんか見る/見られるっていう関係性であったりとか、質の高い何かを作り出すとか、どこかの業界で受ける、みたいな意味での演劇メタファーというよりは、何と言うか、それはどう言ったらいいかわからないんですけれども、みんなでやることによって、事前には想定できなかったものが、結果的にできた感じがするというか、なんかそういう意味での「表現」っていうものが、ホルツマンの発達観の中にはあるのかな、という気がしていました。まとまりませんが。

岸：ありがとうございます。何か今、新原先生がおっしゃられたような「Unexpected（予期せぬ）」とか、「Unscripted（筋書きにない）」という言葉を、ロイス・ホルツマン先生もよく使われたりします。本シンポジウムの前にあった：「ポスト 2020 の教育を考える」というセッションでも、「変化を恐れない」とか「遊び心」がある教師が必要だという話

があり、関連すると思いました。「知らないからできない」ではなく、「知らなくても」または「知らないからこそ」、自分たちで作っていけるんだと、「知らない」を可能性にしていけるような教育について、新原先生のお話を聞きながらイメージしました。

悦子先生！お話いただきたいのですがあと 4 分なので、短めにお話しいただいて、最後に、サトウ先生のコメントをいただきます！

山口（中上）：サクッといきます。その「未知（unknown）」の話っていうことで、先ほど、岸先生が言っていた、「知らないと何もできないよね」って話ありましたよね。知らないことを、恥じる自分がいるというか。

この本の中で、126 ページにも少し述べられているんですけれども、自分たちが「知っている」ことの範囲だけで物事を考えるっていうのは、非常に恐ろしいこと。医療現場は特に、そうなんですけれども、自分たちが「知っている」ことの範囲だけで物事を解決しようとする、問題を抱え込んじゃう傾向があるんです。患者さんは、「何でも知っていて、何でもできるお医者さんとか、看護師さんが素晴らしい」って、思ってるじゃないですか。あの呪縛です。

126 ページには、「未知は、本当は、知られていないことではありません。むしろ、まだ知られていないことだと一般には定義されている」とあります。ここが怖い。実際の臨床の現場で、目の前の患者さんに起こっていることに対応している医療従事者が、自分の「知っている」範囲のことだけで対処しようとしたら！「自分がまだ知らないだけで調べたら、俺にもわかるんだ」と思って一人で抱え込んでしまったら！これ

が大きな医療事故に繋がるんですね。

医療従事者は「未知」、つまり自分が今「知らない」ということを恥じずに自覚し、「知っている」ところと「知らない」ことを線引きして対処できることが大事です。「知らない」と思った時点で、すぐ、病院中に助けを求めて、みんなで総力挙げて対処すれば、助かる命はたくさんあるんですよ。本当に。

なので、私は第 8 章を、すごく深刻に受け止めています。「自分はこれ知らない。わからない。おかしい」と思ったときに、すぐに、他者とつながる反射神経をトレーニングしておかないと危ないな、と思いました。ここ数年、長谷川先生と一緒にインプロを応用して医療安全のトレーニング始めたのは、そういう理由なんです。

「未知」を「知りえないこと」と解釈するのは、命の現場では重要なことだなと思いました。だからそういう意味でその「Unknowability」っていう言葉は、すごく腑に落ちた部分ではあります。

岸：ありがとうございます。茂呂先生が最初に発言してくださった、「そもそも人はそんなにたくさん知らないよ」っていう会話にも繋がったな、と思いました。ありがとうございます。

では、一応時間になっちゃうので、サトウ先生にコメントいただいて、まだちょっと残れるよ、っていう方にはそのまま残っていただいて、登壇者の先生方に一言ずつコメント言ってもらって終わりにしたいと思います。

まず一旦、締めるために、サトウ先生、コメントお願いします。

サトウ：どういう役割やねんっ！て感じすけど（笑）。皆さん、どうも今日はありがとうございました。また、日本質的心理学会理事長の立場から、2 日間のご参加、どうもありがとうございました。

佐伯先生がおっしゃったことは本当に刺激的で、一人称を育てるためには様々な二人称が必要で、先ほど山口（中上）先生がおっしゃったことも、「知らない」って言うために、どういう二人称をつくっていくのか、ということだったと思います。二人称的設定の重要性ですよね。

二人称的設定は、（ある一人からみれば）他者の数だけある無限なものであり、だからこそ様々な「ちょっと先」とか「何かになりたい」を刺激するのかもしれません。すると茂呂さんが言っていた貧困の問題は、新しい二人称的設定が現れることを阻んでいる、ということになるのかもしれません。「ちょっと先」に「なんとかなりたい」って思えない状況ってあるじゃないか。たとえば貧困がそれを作り出しているのではないか。それどうするんだ！っていうことを茂呂さんは叫んでたんだろうな、というふうに思いますね。

一方で、パフォーマンスが三人称的に扱われてしまうという恐れもある。一人一人のパフォーマンスが三人称的に扱われるってことは、知能検査のようにパノプティコン的な評価に絡め取られるということと一緒になることを意味するでしょう。 そうならないように、ちゃんとしなきゃいかんよ、という佐伯先生のお言葉を、他の皆さん、どう捉えたのかってことを知りたいです。

重ねてありがとうございました。

■クロージング

岸：誰からいきましょう。では、喜美先生、どうぞ。

石田：私、チャットでの記録と情報提供ばかりを頑張っておりましたので、ほとんど、口頭でのディスカッションに参加できておらず、申し訳ありません。皆さん、私のチャットでの頑張りを、のちほど、見ていただければと思います。

皆さんのディスカッションを聞いて、この本が、どう使われていくのかを考えていくことが、すごく大事なことなんだと思いました。今日の議論では、この本の議論を先へと広げていくときに、「このようなかたちでミスリードされないようにしなければならない」というポイントが明るみに出たように思います。今日の皆さんとの議論のなかで、そのポイントが押さえられていった印象を持ちました。

また今日のシンポジウムの数時間だけでは、とても議論が足らないということもよくわかりました。この後も、このような議論を続けていきたいと思いますし、そのような議論の場を設けなければいけないということを実感しました。皆さん、これからも、よろしくお願いいたします。

岸：ありがとうございます。新原先生、お願いします。

新原：なんか、ずっと考えてたのは、佐伯先生がおっしゃってた、あの、ホルツマンに、ニューヨークの黒人社会のかっこよさを感じちゃってる

んじゃないかっていう、ご指摘があったと思うんですけど。僕はエディ・マーフィーが、そんなに映画見たことなくてわからないんですけれども、正直、僕自身は、「かっこよさ」に憧れちゃっているところはあるな、ということを思っていて、ただ、それは何かこうファッショナブルさというよりは、彼らの活動が、研究と芸術とか表現っていうものと、それがポリティカルな活動なんだっていうのが、常に一貫されているところに「かっこよさ」を感じている、と思うんですよね。なんかそういう研究を自分もしなければいけないな、と思いました。はい。

岸：ありがとうございます。悦子先生お願いします。

山口（中上）：はい、ありがとうございます。最後、サトウ先生がおっしゃった「どのように二人称を育てていくか」っていうところですね。チャットにも書かせていただいたんですけれども、最初の関わり、二人称をどうトレーニングするか。実践にどう持っていくかっていうのも、これから皆さんと一緒に議論していくことで、ぜひ日本の安全な医療にもご協力いただきたいと思います。ありがとうございました。

岸：ありがとうございます。礼穂先生、お願いします。

太田：ありがとうございます。本日は貴重な機会をいただき、本当にありがとうございました。私も翻訳者であったんですけれども、皆さんと議論をすることで、こういうことを考えないといけないんだなというふうな学びの場になりました。基本的に、出てこなかった話なんですけれ

ども、ホルツマンの面白いところって、もちろん「becoming」とか「a head taler」とかっていう議論も面白いんですけれども、個人的には、情動的なZPD、情動の話、認知と情動がミックスされたときに…っていう話がけっこう大きいと思っているので、ぜひ本書を手に取っていただいて、最後、宣伝なんですけれども、読んでいただければいいかなというふうに思っています。

岸：ありがとうございます。渡辺先生お願いします。

渡辺：はい。途中で出ていた、「知ること」と「unknowability」の話で、正直、私、「unknowability」の方に関しては、まだうまくつかめないんです。一方、ホルツマンがいう「知ること」の呪縛に関しては、すごく腑に落ちる部分があって、「知ること」の呪縛っていうと、一般的には、もしかしたら抽象的な議論として取られかねないのかなと思うんですけれど、私にとってはすごくリアルで、具体的な文脈で捉えられるものです。

私は、学校の先生方、あるいは学生らと、授業を振り返る話し合い、いわゆる授業検討会に関して、そこでの対話のあり方を変える試み、その場で自分が感じたこと・考えたことを出し合ってそれを手がかりに深めていくことを大事にするかたちへと変えていく試みを行ってきたのですが、先生方にせよ、学生たちにせよ、最初はどうしても、「知っていること」を喋っちゃうんですよね。「これにはこういうやり方があるよ」とか「これの落としどころは、こっちに持っていくもんだよね」とか。あるいは授業者自身も、何か言われたときに、「それならこうした

らいいんですね」とか。自分がどこで心が動いたか、ではなく、自分が知っていることをしゃべり、それですぐに結論づけてしまうのです。この呪縛はすごく強くて、私はそれを、ホルツマンの「知ること」の呪縛と重ね合わせて考えていました。

私が授業の検討会に関してやろうとしてきたことは、佐伯先生の考えと近いはずです。佐伯先生も検討会に関して「感じることの大切さ」を唱えておられますし。それで、私にとっては、ホルツマンを読んだときに、「知ること」の呪縛にすごく納得するというか、自分が行ってきたものを照らし出してくれるものとして受け止められたのですが、一方、佐伯先生は、「いや、ホルツマンはまだまだ客観的な見方にとらわれているんだ」「傍観者的な見方になっちゃってるんだ」とおっしゃいます。私から見ると、同じようなことをやろうとしているのに受け止め方が違うのはどういうことかな、というのが疑問で、佐伯先生が引っかかったホルツマンのポイントが一体どこなのかということを知りたいなと思いました。茂呂先生も「ぜひその点、ぶつけてください」とチャットに書き残して、出て行ってしまわれましたが。この点、今後さらに佐伯先生から伺えたらいいなと思いました。ありがとうございました。

岸：ありがとうございます。そして最後に、大取で、佐伯先生。まずは、心から、感謝の気持ちを、申し上げます。ありがとうございます。

佐伯：どうもすみません。「蚊帳の外」だと思って、「蚊帳の外」から、野次馬的に言っていたと思ったら、いつの間にか「蚊帳の中」に入れてもらっちゃって、どうもありがとうございました。

岸：もう仲間です（笑）。ウフフ。

佐伯：ともかく、そういう意味では、何か非常に、話が通じるかもしれないな、というような、「Unknown」＋「ability」みたいなものの期待が、ちょっと沸いてきたっていうところですね。そんなところでですね、また何かあったら、私も仲間に入れていただければ、と思います。仲間外れみたいな人間も、たまには、仲間に入れるっていうこともありかなというくらいのつもりで、呼びかけていただければと思います。今日はありがとうございました。

岸：ありがとうございます。佐伯先生は、私たちの仲間です。これからもずっと声かけさせていただきますね！一緒にこれからも研究させてください。

これにて、本シンポジウムを終わりにいたします。私、青山先生、渡辺先生など、カメラオンにしておりますので、この後は、自由にフィードバックいただけると嬉しいです。

ご参加いただきました皆さま、ありがとうございました。また一緒に議論できる場を作っていきますので、引き続き私たちと一緒に会話をしてください。

日本認知科学会　教育環境のデザイン分科会　活動記録 No.11
知識偏重社会への警鐘
―「知らない」のパフォーマンスが未来を創る―

発行者　日本認知科学会　教育環境のデザイン分科会
発行日　２０２１年５月３１日